

木下北城遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1977

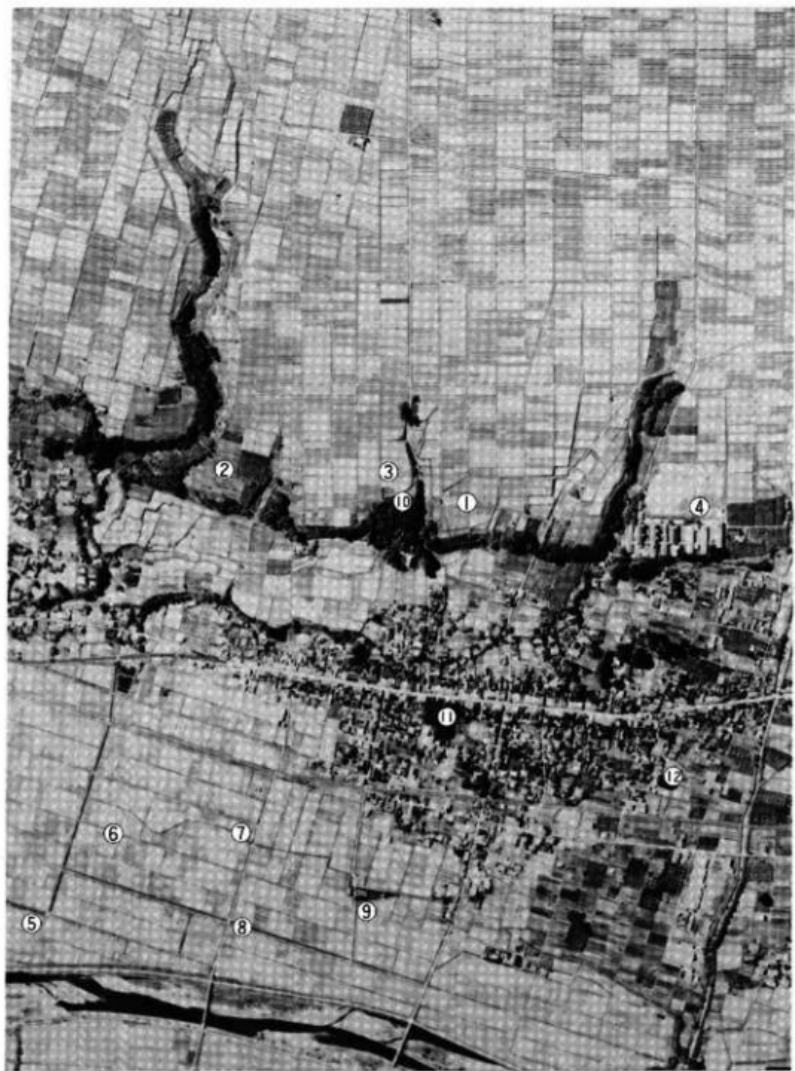
箕輪町教育委員会

北城遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1977

箕輪町教育委員会



- ① 北城遺跡 ② 猿樂遺跡 ③ 南城遺跡 ④ 上の林遺跡
⑤ 曾根田遺跡 ⑥ 渋田遺跡 ⑦ 穴田遺跡 ⑧ 小清水遺跡
⑨ 大清水遺跡 ⑩ 斧輪城跡 ⑪ 南宮神社 ⑫ 芝宮のけや木

序

昭和47年度から3ヵ年にわたって長野県営住宅団地が、箕輪町木下区北城地籍に設定されるに当り、この地籍は古い歴史に係わりがある埋蔵文化財包蔵地として目されている場所でもあるので、町としても文化財保護の立場から町教育委員会の意向を尊重してこの遺跡発掘に踏み切り、幸いに県住宅部の御配意と町議会の御理解の下、優秀なる調査団の先生方に依ってこの地の遠い歴史の一部が解明されたことは感謝に堪えない所であり、その出土品は本年建設を予定される郷土博物館の陳列品の中で光彩を放つであろうことを予想して欣快に存する次第で、調査報告書の刊行に当って関係各位に対し心からなる謝意を捧げる次第である。

箕輪町長 清水重幸

はじめに

北城遺跡が、位置的に見て弥生時代の大遺跡である箕輪遺跡や、『倭名類聚鈔』所載の幻の美和郷などと深いかかわり合いがあるであろうことは自ら予見される所であったが、今回北城県営住宅団地の造成に際して発掘の機に恵まれ、幸いに林茂樹団長をはじめ造詣の深い調査団の先生方の御協力により、この歴史の一部が解明されるに至ったことはまことに感謝に余りあることである。

予見に違わず、47年4月27日から9日間にわたっての発掘に依って30余の遺構が発掘され、その時代も古く繩文の時代から鎌倉・室町に及んで、この舌状台地が幾千年の昔から連続と歴史を継いで来たことが判明した。発掘面積は、広大な用地のはんの一隅にしか過ぎず、用地全面の発掘が行われたならば、更に深い解明がなされたと思うが、造成の期限、町予算支出にも限界がある等の点から、残念ではあるが止むを得なかった。

発掘後、調査が測量・復元・製図などと整理に予想外の時間を要し、この間調査団の先生方の御苦心も並大抵のものではなかったが、今日漸く発刊の日を迎えることとなり喜びに堪えない。

終りに当って調査団の諸先生方、発掘に従事された作業員、特に木下区役員、伊部弥生ヶ丘高校郷土クラブと同校生徒及び箕輪工高の生徒諸君、また製図に当られた明治大学史学科の諸娘など関係された各位に対し心からなる感謝のことばを申し上げたく思う次第である。

箕輪町教育長 河手貞則

凡　　例

1. この調査は県企業局による宅地分譲及び県営住宅団地を造成する事業前に終了する計画のため緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は、図版を主体とし文章記述は簡略とし、又調査の主眼は河岸段丘上の弥生時代後半期の集落構造及び奈良・平安時代の遺構・遺物の究明に絞った。
3. 本報告書の執筆および図版作製分担は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記しその責任を明らかにした。

本文執筆者 林茂樹、白鳥伝、堀口貞幸、小林恭治、柴登巳夫 (順不同)

図版製作者

- ・遺構及び地形実測図 柴登巳夫
- ・土器拓影 白鳥伝・春日平四郎
- ・土器、金属器及び石器実測図 柴登巳夫
- ・土器・石器実測図 明治大学学生(紋田和枝、原美智子)

写真撮影

- ・発掘及び遺物 林茂樹、小林恭治、堀口貞幸、柴登巳夫 (順不同)

4. 本報告書の編集は調査団長と箕輪町教育委員会があたった。

目 次

序

はじめに

凡 例

目 次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の位置及環境 (6~9)

 第1節 位置及自然環境 (6~8)

 第2節 歴史的環境 (8~9)

第Ⅱ章 発掘調査の経過 (10~19)

 第1節 発掘に至るまで (10~12)

 第2節 調査経過 (12~14)

 第3節 発掘概要 (15~19)

第Ⅲ章 弥生時代の遺構、遺物 (20~53)

 第1節 遺構 (第1表 弥生時代遺構要目一覧) (20~33)

 第2節 遺物 (第2表 弥生式土器要目一覧) (34~53)

 (1)土 器 (34~43)

 (2)石 器 (第3表 出土石器要目一覧) (44~53)

第Ⅳ章 平安時代の遺構、遺物 (54~73)

 第1節 遺構 (第4表 土師式竪穴住居址要目一覧) (54~60)

第2節 遺物	(61~73)
(1)土器類 (第5表 土師器、須恵器、灰釉陶器要目一覧)	(62~63)
(2)金属器	(72~73)
第V章 中世の遺構、遺物	(74~79)
第1節 遺構	(74~78)
(1)濠渠址	(74)
(2)土 壤	(75)
(3)火葬墓	(76~78)
第2節 遺 物	(78~79)
(1)古 銭	(78~79)
(2)古陶片	(79)
第VI章 所 見	(80~81)
第VII章 おわりに 町民のみなさんへ	(82~83)

図 版 目 次

図1 北城遺跡の位置.....	6
図2 北城遺跡景観遠望.....	7
図3 北城遺跡周辺の遺跡図.....	8
図4 北城遺跡地形及び発掘区域.....	10
図5 北城遺跡地層実測図.....	11
図6 発掘風景.....	12
図7 遺物出土状況1.(9号址土師器).....	13
図8 遺物出土状況2.(鉄製品).....	14
図9 遺物出土状況3.(弥生式土器、紡錘車).....	15
図10 遺物出土状況4.(碇、刀子).....	16
図11 遺物出土状況5.(弥生式土器).....	17
図12 遺物出土状況6.(弥生式土器).....	17
図13 遺物出土状況7.(青銅製容器).....	18
図14 遺跡の発掘状況(弥生式住居址、土壤).....	18
図15 発掘区全景.....	19
図16 北城遺跡全測図.....	19
図17 発掘区全景.....	20
図18 弥生時代遺構全測図.....	21
図19 弥生時代竪穴式住居址内埋甕炉.....	23
図20 弥生時代竪穴住居址実測図(1).....	24
図21 弥生時代竪穴住居址景観(1).....	25
図22 弥生時代竪穴住居址実測図(2).....	26
図23 弥生時代竪穴住居址景観(2).....	27
図24 弥生時代竪穴住居址実測図(3).....	28

図25 弥生時代竪穴住居址景観(3).....	29
図26 弥生時代竪穴住居址実測図(4).....	30
図27 弥生時代竪穴造構景観(4).....	31
図28 弥生時代土壤景観.....	32
図29 弥生時代土壤実測図.....	33
図30 出土弥生式土器拓影(1).....	36
図31 出土弥生式土器拓影(2).....	37
図32 出土弥生式土器実測図(1).....	38
図33 出土弥生式土器実測図(2).....	39
図34 出土弥生式土器実測図(3).....	40
図35 出土弥生式土器実測図(4).....	41
図36 出土弥生式土器写真(1).....	42
図37 出土弥生式土器写真(2).....	43
図38 出土石製品及土製品写真.....	44
図39 出土石器実測図(1).....	46
図40 出土石器実測図(2).....	47
図41 出土石器実測図(3).....	48
図42 出土石器写真(1).....	49
図43 出土石器写真(2).....	50
図44 出土石器実測図(4).....	51
図45 出土石器実測図(5).....	52
図46 石製碇写真.....	53
図47 平安時代造構全測図.....	54
図48 平安時代竪穴住居址実測図(1).....	56
図49 平安時代竪穴住居址実測図(2).....	57
図50 平安時代竪穴住居址写真.....	58
図51 平安時代竪穴住居址及遺物出土状況.....	59

図52 平安時代竪穴住居址第22号址出土状況	60
図53 出土土師器実測図(1)	64
図54 出土土師器写真(1)	65
図55 出土土師器写真(2)	66
図56 出土土師器実測図(2)	67
図57 出土須恵器及金属器写真	68
図58 出土須恵器実測図	69
図59 出土祭祀用遺物写真	70
図60 出土灰釉陶器実測図	71
図61 出土金属器実測図	72
図62 出土石製品及土製品実測図	73
図63 中世土壙墓実測図	74
図64 中世土壙墓発掘状況	75
図65 中世火葬墓実測図	76
図66 中世火葬墓発掘状況	77
図67 中世墓壙出土宗銭拓影	78
図68 中世遺物写真	79

第Ⅰ章 遺跡の位置及び環境

第1節 位置及び自然環境

1. 位 置

本遺跡は長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪(13281-1)番地に所在する。飯田線木下駅より西方へ約1kmの第三段丘突端部において発見されたが同類遺構は西方へおよそ500mは続くものと見做され、その面積はおよそ90,000平方mに及ぶものと認められている。この発掘地点はその東南端部に当たる箇所である。(白鳥伝)

2. 自 然 環 境

箕輪町を中心とする北は辰野町から南は伊那市に至る天竜川の右岸(竜西)には、海拔2296.3mの

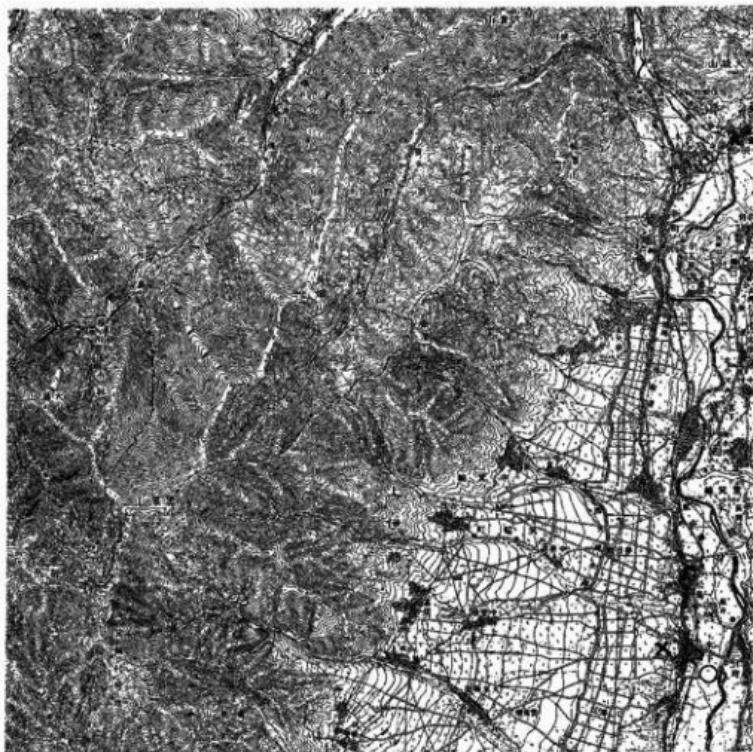


図1 北城遺跡の位置 10万分の1 × 北城遺跡 ○ 箕輪水田遺跡

経ヶ岳を主峰とし、黒沢山(2126.8m)・桑沢山(1538.3m)を支脈とする地盤山地から、東方に流下する小河川、即ち大泉川・帶無川・深沢川等によって南北12km、東西の巾広いところ約6kmの複合扇状地形が形成され、これら河川の運搬堆積物が多量のため天竜川の流路が東方に押しやられた形になっている。したがって左岸(竜東)の扇状地及段丘等この地域においては小規模である。右岸の複合扇状地は礫・砂・粘土・ローム(火山灰)等が相重って堆積し東方に向って緩かな傾斜をしている。木曾駒ヶ岳(標高2956.3m)を主峰とする木曾地盤山地、伊那山脈・赤石山脈の隆起に伴って伊那盆地の堆積面も地盤の隆起があり、天竜川の回春・浸食の復活により数段の河岸段丘が扇端部に形成され、浸食の復活は天竜川の支流のこれら小河川の上流・中流部迄及び、これ等小河川の天竜川の合流する地点には天井川式地形さえ見られるものもある。

複合扇状地の扇頂部・扇央部より地下に浸透した地下水は、伏流水となって洪積台地の下をくぐり扇端部の段丘崖下に清澄な湧水となってでている。年間の水温も一定で15℃の測定値が得られた。この豊富でしかも清澄な湧水が段丘上に居住した古代人の唯一の飲料水であり又農業用水でもあったのである。

さて北城遺跡は、箕輪町木下市街地の西端標高705mの台地上にあり、天竜川氾濫原との比高は約37mである。清水英樹氏の研究(注1)によれば神子柴礫層・神子柴面に相当すると思われる。この箕輪町木下及松島の市街地西部の台地上には遺跡が南北に並び、曹洞宗の養泰寺の北方台地には北城遺跡、南には南城遺跡、その南に猿樂遺跡等があり、北城遺跡の北方には上の林遺跡、本城遺跡等が縦に並んで各遺跡とも或共通点を持っている。



図2 北城遺跡遠望（東側上空より）

段丘崖の微地形を見るにこれら遺跡と遺跡との間は小浅谷によって刻まれて舌状台地になり、小浅谷は台地上に通ずる道路になり舌状台地が住居址の位置になっている。この小浅谷の成因は帶無川の分流による下方浸食と段丘崖下からの頭部浸食によるものと考えられ、段丘崖の微地形を示す等高線はS字状をなしている。この舌状台地は西方の山麓迄約5.5kmの沃野、山林が続き野山の幸は豊かで直下には清澄な無限の湧水があり、約1km東方の天竜川に至る沖積地は豊かな水田を作る土地を提供し村作りの場所に最適であったと思われる。(白鳥伝)

注) 1. 上伊那誌(自然篇)

第2節 歴史的環境

新たにその規模をあきらかにした「北城遺跡」の地名をたずねれば、旧藩時代の絵図(注1)では「法蓮寺」(寺を路とも書く)、「引導畠」であり、明治11年の古図(注2)では「北城」、「旧天神南」となっている。とくに通称「法蓮寺(路)」の村人の呼び名は一般的であり「天王」より「法蓮寺」を通じて「后」にいたる約300m間の村の英雄時代の伝説は、統一国家形成期の前方後円墳「松島王墓」と結びつけられているほどである。

(注2 図1参照)

「北城遺跡」の南に約100m余堀をめぐらせた木下氏の據城「南城」の段丘上(図2)西天竜開田にさいして発見された「南城遺跡」があるが、ここでは「弥生式土器」と「須恵器」「土師器」がおびただしく発見され、土師式住居址の構造も確認されてい



図3 北城遺跡周辺の遺跡 × 北城 ○ 純文 △ 弥生 ● 土師

る。(注3)とくに土師器の壊や須恵器の完形品の出土をみていることは注目せねばならない。

これらの段丘突端線上には別掲図のごとく遺跡が存在するが、とりわけ南箕輪村塩の井の「天伯遺跡」は、土師式集落として著名である。(注4)

「北城」より「天伯」にいたる段丘線下にひらけた天竜川の氾濫原には「箕輪遺跡」として数十万本にわたる木櫛に囲まれ開かれた弥生・土師の大集落の研究調査報告(注5)がある。

弥生式初期・中期の遺構の存在が確認され、さらに土師式遺構は全域にわたっていることは注目に値しよう。今日土地改良区により約80町歩余の水田が整備されたが、弥生式以来の美田をもつこの氾濫原には、やがて天正10年(1582年)6月近世的平城として構築された「田中城」と城下町造成があり(注6)、その後の小笠原時代の慶長6年(1601年)より11年間、この平地は箕輪一万石の陣屋町としてすこし、慶長17年(1612年)「南城」遺跡下の「木下陣屋」へ移るまで箕輪の政治中心としての役割を果している。このような大規模な「水田」遺構と「北城」遺跡との関連は密接なものがあつたことは察せられるが、とくに氾濫原を襲った洪水については注意しなくてはならない。

奈良・平安期の記録にある「天竜川」の洪水記録(注7)が「北城」遺跡の複合制と関連あることはあきらかであろう。「北城遺跡」より「箕輪遺跡」へは二段丘があり、湧水による「水田」「畑」の造成はあったことになろうから、帶無川、天竜川の氾濫よりとりのこされたこの段丘へ、人々は居住することになったものとみなされよう。

「南城」についてその遺構は現存し、新たに規模をあきらかにした北城遺跡を含めて、城砦と城主については改めて検討を要することになろう。とくに城主は「木下氏」「木曾氏」と諸記録は諸説にわたるが(注8)「福与城」の支城としての「木下氏」と、木曾谷の霸者「木曾義昌」の祖流を城主とする、東と西の南信州を代表する系譜を誇ることは注目に値する。

終りに「南城」下の観音堂には平安期以来の觀音信仰の伝承をもつことは、地名(「清風の池」など)よりあきらかである。(堀口貞幸)

注) 1. 筆者所載

2. 上伊那地方唯一の前方後円墳の松島北村の墳墓の葬者について、約2km余南の木ノ下の「天王」と「后」の居住者であることについての推測は「上伊那郡史」以来の村の説話となっている。

3. 有賀京「中箕輪に於ける石器時代及古墳時代の三大遺跡地」(「伊那史稿」第二号昭和12年11月刊)

4. 伊那路12巻2号「天伯遺跡緊急発掘調査特集号」

5. 藤沢宗平「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」信濃7巻2号

6. 北原通男「城岡末期の箕輪地方」(前掲3の引用文献と同じ)

7. 9 Cの仁和4年(888)などがあげられよう。(信濃史料2巻)

8. 関盛胤「伊那温泉史」(伊那史料叢書 卷)など参照。

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

高度経済成長政策の推進とともに中小企業の増加と生活の近代化、生活環境の整備は町の行政上最大責務の一つであるとともに町民の強い要望もあるため、人口の増加を推進し世帯の分離化傾向による住宅需要に応えるため、県企業局による宅地分譲及び県営住宅団地を造成するため県企業局と協議の結果昭和46年2月木下区南城地籍に位置を定めて整備計画が策定された。

(宅地面積 89,851m²)

昭和46年3月南城地籍に位置の決定がなされ用地の買収計画が進められたが耕作面積を多く所有する地主が所在するためこの計画は変更せざるを得なくなり昭和46年10月南城地籍の道路を隔てた北側の北城地籍に変更することとなり、用地買収する段階となった。(買収計画面積 86,905m²)

この南城に住宅

団地造成計画が策定されたことにともない教育委員会では当地籍は大正8年西天竜耕地整理組合の設立により水田工事が行なわれた当時弥生式土器の出土が確認され、南城遺跡として記録されていることから同遺跡を記録保存するため緊急発掘計画について検討、県教委文化課の指導を得るとともに関係各方面とも折衝を重ね昭和47年度当初予算に発掘費を計上し、北城遺跡



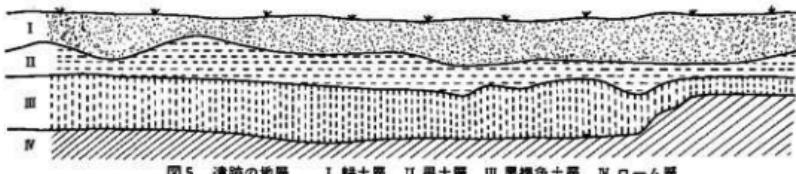
図4 地形及び発掘区域

を緊急発掘し記録保存をすることが決定された。

(経過内容)

- 46・2・5 県企業局関係課長、並に松田県議により住宅団地候補地調査。
- 46・3・12 木下南城地籍が最適と決定。
- 46・5・12 南城住宅団地の埋蔵文化財包蔵地の確認のため文化財調査委員により現地調査。
- 46・9・8 文化財調査委員会を開催、南城遺跡発掘について協議。
- 46・10・14 南城地籍は買収困難となり北城地籍に変更を決定。
- 47・1・25 教育長、町長と北城遺跡発掘について協議。
- 47・2・14 教育長出県、県教育委員会文化課にて発掘について合議指導を受く。
- 47・2・28 町長出県、企業局と発掘調査費その他について折衝。
- 47・3・4 町教育委員会開催、発掘について協議する。
- 47・3・17 3月定例町議会において発掘予算案可決される。
- 47・3・24 県文化課桐原主事に来町を求め現地視察のうえ発掘について位置・予算配分・発掘方法等につき指導を受ける。
- 47・4・10 町教育委員会、文化財調査委員の合同会議開催発掘計画並びに調査団の委嘱について協議決定する。
- 47・4・18 調査団による発掘調査について細部の打合せ会開催。
4月27日～5月3日まで発掘するも予想外に遺跡地が広く未調査部分を残して計画日程を終る。
- 47・5・5 調査団より第二次発掘について強い要望あり。
- 47・5・7 県文化課桐原主事来町、拡大発掘について事情聴取並びに現地視察。
- 47・5・8 教育長、町長に第一次発掘結果と第二次発掘の要望事項について説明。
- 47・5・17 教育委員会を開催し拡大（第二次）発掘について協議。
- 47・5・18 教育委員長、教育長第二次発掘について町長に陳情。
- 47・5・20 町議会臨時会に於て第二次発掘費につき協議。
- 47・5・27 第二次発掘について調査団の打合せ会開催。
5月29日～6月13日までの間4日間第二次発掘調査を実施する。
- 47・6・24 第二次発掘調査費の補正予算案を町議会で可決。
- 48・3・16 北城遺跡発掘調査報告書印刷費として20万円の補正予算案を町議会で可決。

(小林恭治)



北城遺跡発掘調査団の構成

調査團長 林 茂樹

調査主任 堀口貞幸

調査員 柴登巳夫、白鳥 伝

調査補助員 本田秀昭、小池政美、友野良一、根津清志、福沢幸一、三村兼清、清水博之助、和田武夫、吉村進、北沢頌子、市川修三、伊藤修

調査助手 唐沢千洋、北原宣明、田中美代子、茅野かよ、春日琢爾、矢島伝三郎、唐沢義美、白鳥弘、馬場玲一、田沢藤治、藤森千万喜、荻原軍吾、中村高男、白鳥昭和、今井勇

事務局 教育長 河手貞則、公民館長 戸田彙人、社会教育課長 福原良明、社会教育主事 小林恭治、書記 原宏三、中村由美子

第2節 発掘経過

4月27日 ㈭ くもり 午前8時45分より調査團、事務局で現場での発操作業内容につき協議を行なう。ブルトーザーで表土20~30cmの排土作業より開始する。

発掘予定地点中央部より東西に排土し、開始間もなく2ヵ所の落込みを発見する。東西6m、南北5mくらいの方形の落込みの中からは弥生式土器片の多数を検出する。これを第1号竪穴式住居址とする。

午後になり他の落込みより弥生・土師・須恵・灰釉等の出土遺物多く、調査を進める段階に弥生時代と平安時代の2竪穴住居址の複合状態が検出された。この他にも3ヵ所程の落込みを確認するにとどめ明日にまわす。

調査員 4名 補助員及び事務局 6名 作業員 3名 助手 5名 計 18名

4月28日 ㈮ 晴 本日はブルトーザー2台で発掘予定地の南側を中心に排土作業を開始する。

昨日確認された1~3号址の調

査はそのままにしておき、排土によって発見された落込み3ヵ所を中心と調査の推進をする。

第2号住居址より2m南より発見の落込みから弥生式・土師式・須恵・灰釉の土器片が多数検出され追跡調査の結果2・3号址と同様、弥生時代と平安時代住居址の複合状態を確認。又その



図6 発掘風景（手前より第3号址及第2号址）

地点より南へ15m、同じ時代と推定される複合の2竪穴を発見、それぞれ4・5号6・7号竪穴式住居址とする。

それ等の発見と平行して5号址の東南約2mに土師式土器片を伴う落込みがあり夕方までは、ほぼ正方形の竪穴式住居址を確認する。1~5号の住居址列の東側に土壤を多数検出、土壤層ではないかと推定されるが明日の追跡調査を待つことにし又明日の中央道調査員の応援にそなえる。

調査員 3名 補助員及び事務局 6名 作業員 5名 助手 3名 計 17名

4月29日(土) 中央道の調査員の応援あり発掘調査もいよいよ山場を迎える。1号址より北側に3ヵ所の落込みが検出され計11号までの竪穴址に調査員1名づつが担当し細部にわたる調査を推進する。各住居址からは出土遺物も多く、弥生時代の住居址のほとんどから埋葬炉が出土している。昨日より続けられた小土壤群の精査の結果、古銭が数枚検出され土壤墓と考える。又11号竪穴址の東より部分は漆と考えられる落込みによって切り取られている。この落込みと接する位置から3ヵ所の火葬墓があり、いづれも人骨と共に宋銭が含まれていた。引き続き行なわれていたブルトーザーによる堆土の範囲も遺跡北部から台地突端まで拡大され数ヵ所の落込みが発見される。又周濠と思われる落込みの調査も午後から開始する。

調査員 4名 補助員及び事務局 11名 作業員 39名 計 54名

4月30日(日) 雨のちくもり 今日4日目を迎えた発掘作業も各住居址とも精査に入り新しく発見した落込みもしだいにプランが明らかにされた。第9号址の北側に第12号弥生式竪穴住居址、又段丘突端寄りに第13号弥生式竪穴住居址がそれぞれ方形のプランをもって確認される。1~5号住居址列の西側に南北に走る周濠が昨日までの調査によって確認されているため、2mおきに濠を部分発掘してみる。濠の中は3~5mで深さ80cm~1m程度である。濠の中よりの遺物として少量ではあるが中世のものから須恵器・土師器・弥生式土器等が土と共に流れ込んでいる。この作業中に14号弥生式竪穴住居址発見。段丘突端よりに発見された13号址と並び15号址が検出されプランの追跡調査が行われる。又12号址に接して16号址も発見、明日の精査を待つことにする。

調査員 4名 補助員及び事務局 4名 作業員 40名 助手 7名 計 56名

5月3日(水) 晴 2日間の雨もやみ調査もまとめの段階になる。12・15・16号各住居址の調査を中心に進め、精査の終った順に写真撮影にそなえて清掃をする。12号址は遺跡中最大のプランを有し床面には100余のピットが検出される。

調査員 3名 補助員及び事務局 7名 作業員 19名 計 29名

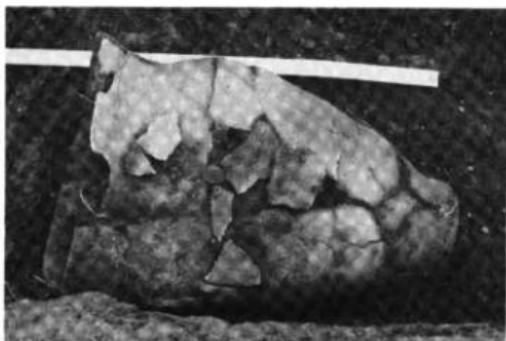


図7 遺物出土状況 I 土師器(9号址)

5月4日 休 晴 昨日作業が完了しなかった15号址の調査をする。床面上より刀子の出土を見る。

他の住居址は実測にうつる。本日で調査を終了する。

調査員 3名 補助員及び事務局 4名 計 7名

(柴 登巳夫)

第二次発掘経過日報

(第二次調査目標)

舌状台地の突端南部の未発掘ヶ所 600m²をブルトーザーで排土後住居址を確認し段丘突端における弥生時代住居址の全貌を明らかにすると共に、一部発掘した周濠がこの住居址群といかなる関連をもつかを明らかにするため第2次発掘を必要とした。

5月29日(月) 晴 遺跡南部をブルトーザーにより排土作業を開始。平行して周濠の調査に入る。11号住居址の東に中央部を濠によって切られる状態で住居址を発見、第17号弥生住居址とする。この17号址を中心とした濠の調査が進むにつれ火葬墓の発見あいつぎ本日だけで11余確認される。又南側の排土作業中に落込みを2ヶ所確認し一方を18号址とする。午後になり遺跡西南部をブル排土中にも2ヶ所の方形落込みあり調査は明日とする。

調査員 3名 補助員及び事務局 6名 作業員 22名 計 31名

5月30日(火) 小雨のちくもり 朝からあいにくの小雨だったが作業を決行することにし、昨日に引き続いて、17・18号の調査、平行して西南部にあった落込みを調査する。作業の進むにつれそれぞれ19・20・21の弥生式土器を伴う竪穴式住居を確認、又18号址と切り合って22号址を発見、午前この22号址より完形青銅製容器が出土、調査にあたった人々皆おどろく。本日までに17~22号住居址のプランの確認と遺物の取り上げを完了。

調査員 3名 補助員及び事務局 4名 助手 5名 作業員 24名 計 36名

6月11日(日) 晴 前日までの作業のまとめと未完掘住居址の精査をする。第11号址の位置で濠は、ほぼ直角に曲がり突端に向いて走っていることが判明。このカーブする位置から20号址にかけ確認されただけで20ヶ所をこえる火葬墓出土、いずれもT字状に作られ、赤く焼けた石組の中からは、骨・炭がぎっしり入っている。南側の22号址周辺の調査中に第24号址を確認したが明日にする。

調査員 4名 補助員及び事務局 9名 助手 6名 作業員 21名 計 40名

6月13日(火) 第24号址が完了しなかつたため補充調査。

土師器、須恵器、灰釉等の出土物が多い。箕輪中部小学校の生徒が見学に来る。

本日で第2次の調査終了。

調査員 3名 補助員及び事務局 4名 助手 2名 計 9名 (柴 登巳夫)

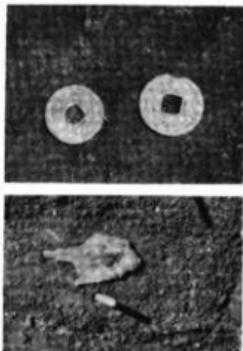


図8 遺物出土状況2
宋銭(口号址) 鉄鏡

第3節 発掘調査概要

1. 第一次調査

ゴールデンウイークを予定した第一次調査は4月27日から5月4日までの6日間実施した。途中2日雨で延びたが他は晴天に恵まれその上、調査に参加していただいた多くの方々の献身的なご協力とご配慮によってスムーズに進めることができた。今回の発掘は段丘上舌状台地突端の遺構の所在を確認することに主眼を置き、予定面積約2700m²のうち、第一層（黒土）約20cmをアルトーザーで排土する作業より開始する。発掘予定地は東西30m、南北90mの長方形とし、南北中心線より東西に排土をする。発掘予定面積の7割までが水田、他は畠地である。水田工事で上層部は攪乱されておるため、田の地場を排土の境とする。アルトーザーの終了地点より第2層へと作業を進める。間もなく落込み2ヶ所が発見され同時に弥生時代の土器片を認め、これを追跡調査の結果、東西約6m、南北約5mの方形の竪穴住居址であることが判明、これを第1号竪穴とする。この第1号より南によること2m余、やはり方形の落込みがあり、調査を進めると、弥生式土器の壺・甕・土師・須恵・灰陶等の遺物も多数出土。この竪穴のプラン確認の過程において、1辺5m=50cm程の隅丸方形の弥生時代竪穴住居址の中に1辺4m、正方形の平安時代竪穴住居址がすっぽりと入っていることが判明した。この発見により、この発掘予定地内には弥生時代から平安時代にかけての集落が中心となるのではないかと予想された。この3住居址を見るかぎりでは4層のロームに切り込んで竪穴が構築されている。発掘は中心部より南に延びるにつれ落込みの数も増し住居址数も多くなる。第2号竪穴を発見して間もなく、その南に4・5号竪穴が複合して発見。又この住居址から南に15m離れた所に同じく複合の6・7号の竪穴を発見する。調査第3日目には調査員及び人夫の数が増したので発掘は広い面に拡大された。これ等の住居址群をとりまくように周濠の遺構が現れる。同時にこの住居址列の東側に長方形、円形及び不正形の十数個以上の土壙の出現もみる。の中には古錢を伴って各時代の土器片が出土しているものもある、又弥生時代の竪穴の床面下からは埋葬炉の出土も多く見ることができる。土壙群調査中に第8号竪穴住居址発見、土師の土器片を伴い3m余の正方形に近いプランを呈する壁高の少ない住居址である。

発掘も中央部から北側にうつり9~12号の住居址が発見される。このうち9号竪穴はカマドを東西の壁に2ヵ所設け、西側のカマドを中心とし土師器の壺・甕・須恵器の壺等の出土を見た。第11号址は周濠によって東側3分の1程切り取られている。又この住居址からは2個の埋蔵が検出された。東北の隅にある第12号址はこれまでに調査されたものの中では最大のプランで東西7m=70cm余、南北6m余というも

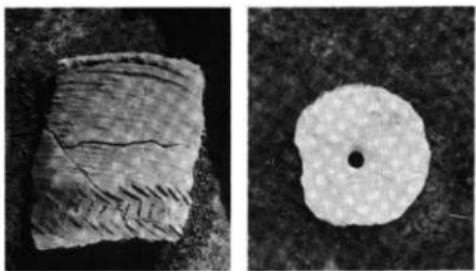


図9 遺物出土状況3 土器片（口号土底床面） 納縫車（12号址）

のでその上、床面上には大小 100余のビットあり柱によって室割りをしたのではないかと考えられる柱穴列もある。

遺跡中央部の段丘の突端よりの調査中にいづれも弥生時代の埋甕炉を伴う竪穴が 2ヶ所検出され 15号址からは刀子の出土を見、又 13号址には 1辺 1m の正方形の落込みがほぼ等間隔に 3ヶ所ある。中世の建物の柱穴址かとも考えられた。発掘初日より疑問も投げかけていた周濠のプランの調査も進むにつれ徐々に判明しはじめた。第 1号址西側を 4ヶ所に分け調査の結果 2段に構築され、ほぼ深さ 1m、巾 3m 余のプランであり濠の中からは中世の遺物と土師、弥生等の土器片が流れ込んでいる。この周濠は舌状台地突端部に建てられた中世の屋形を取りまく濠ではないかと推定したが一部分のみの調査のため推定にとどめる。この濠の調査中に 14号弥生の住居址が発見されたが濠により約 4 分の一しかプランは残っていない。又第 12号址調査中にもこれと切り合って 16号址を発見、いづれも弥生時代である。以上 6 日間にわたる第一次調査を終了したが、延入員 200人余による発掘作業の結果、舌状台地の先端部 2700m² の範囲内に縄文時代・弥生時代・平安時代・室町時代の各時代にわたる先人の遺構 30余ヶ所が発見され、その内訳は次のようである。弥生時代竪穴式住居址 16戸、平安時代竪穴式住居址 5戸、墓壇 6、火葬墓 3、周濠 1、方形柱穴址 1 をふくむ合計 35ヶ所の遺構が発見された。

(柴登巳夫)

2. 第二次調査概要

一次終了の結果舌状台地の突端南部及び西北の未発掘の部分の排土をし、住居址の確認をすると共に住居集団の様相を明らかにし、一部発掘した周濠がこの住居址群や方形の落込みといかかる関連をもつかを明らかにすることを狙いとし発掘を開始した。5月29日より 4 日間行なわれたが、この 4 日間の発掘作業を通して前書した初期の目的を幾分でも達成することができたことは大変幸いであった。又青銅製盤の出土、多数の火葬墓の発見は本遺跡中で注目すべきものと思われる。

まず第一の目標であった未発掘の南部の排土から開始。これと平行して周濠の調査に入る。11号址の東に中間を濠によって切られた住居址が発見され、第 17号址とする。この住居址の調査が進むにつれ多数の火葬墓が現われる。火葬墓のはほとんどは炭、骨がぎっしり入っておりまわりの土も真赤に焼けている。又南部の排土を進める段階で 3ヶ所の落込みがあり、まず 7号址の南に 1辺 5m = 50cm 程のプランをもつた方形住居址があり、弥生時代の土器の出土と共に石製の碇が住居址床面上に出土。

第 12号住居址の西側一面を第一次発掘で排土し、表面が乾燥して白くなっているところが 1 辺 5m の正方形に真黒になっている。これはどうした訳かと考えたが、下に住居址があるため、住居址内の水分が、乾燥しきれず、黒土のまま残ったのである。言いかえれば住居址床面が非常に堅いため雨水等の水分の浸透がこの面で止まり、住居内の黒土の含水

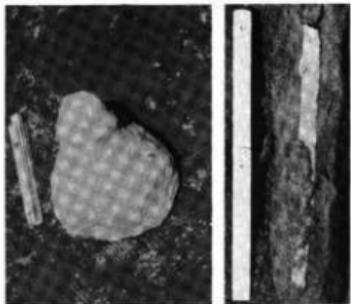


図 10 遺物出土状況 4
石碇（第 18 号址） 刀子（15 号址）

量がまわりに比べ著しく多くなっていたのである。これは住居址発見の一方法を偶然にも教えた感じである。これを第19号址とする。周濠によって中央部を切られた17号址と火葬墓を調査しながらその範囲を拡大し周濠に添って東に進むと、東西に長いプランをもつ弥生時代の土器片を伴って住居址が発見される。この床面を精査すると住居址のはば中央に深さ5~10cm、径15~20cmの小ピットが数個円周状に並んで現われる。この状態は統一して発見された21号弥生住居址にも認められる。ピットの大きさ、深さ配置の様子等非常に似ており共通点を感じた。第3日目、雨の中で行なわれた作業で、困難な状況下に置かれたが、午後になり第22号住居址より青銅製の完形容器の出土には調査に従事した全員の注目するところであった。土中より出たばかりの美しい青色は千余年も土中に埋れていたとは想像しがたいものであった。21号住居址の南に23号の住居址を確認したが發掘することができなかった。第二次調査も最終段階に入り、残った24号住居址と周濠及び火葬墓群の精査をする。この24号の出土遺物を見る時、手づくね土器や墨書き土器等から考え祭祀住居と推定される。プランがはっきりせず、最終日にやっと完掘までこぎつけた。又遺跡西側を南北に走る周濠は南に行く程その深さを増し、巾も大きくなっている。底には砂が少し混入し時には水の流れのあったことを思わせる。濠は第11号住居址を切ったところで方向を東にかえ段丘まで直進している。

第一次調査の段階では3ヵ所のみ発見されなかった火葬墓は二次調査において20ヵ所に及び中には古錢を伴うものも多く一様に掘の斜面を利用し、多くはT字状をなし、中央部に通風溝を設けている。以上が5日間にわたる第二次発掘の概要である。数日後実測作業が行なわれた。

第二次調査によって発見された内訳は次のようである。

弥生時代の竪穴住居址6ヵ所。(うち1ヵ所は未発掘) 平安時代の竪穴住居址2ヵ所。土壙及び火葬墓22ヵ所であった。

以上述べたように、広範囲と目される北城遺跡の最東端部2700m²を発掘調査した結果、



図11 遺物出土状況5 (弥生土器 15号址)



図12 遺物出土状況6 (弥生土器 15号址)

発見された遺構を要約すれば次の通りである。

〔時代〕 〔遺構〕

- | | |
|---------|------------------------------|
| 弥生時代 | 住居址17軒、土壙6穴 |
| 平安時代 | 住居址7軒、土壙3穴 |
| 室町時代 | 柱穴址1軒、墓壙4穴、火葬
墓址17基、濠渠址1基 |
| (柴 登巳夫) | |



図13 遺物出土状況7 (青銅製容器 22号址)

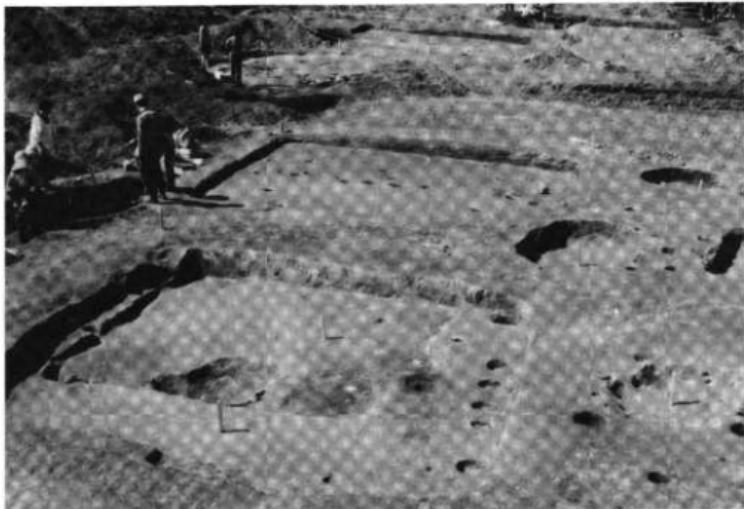


図14 遺構発掘状況 (第23.1号址及土壙群)



図15 発掘区全景（東側上空より）

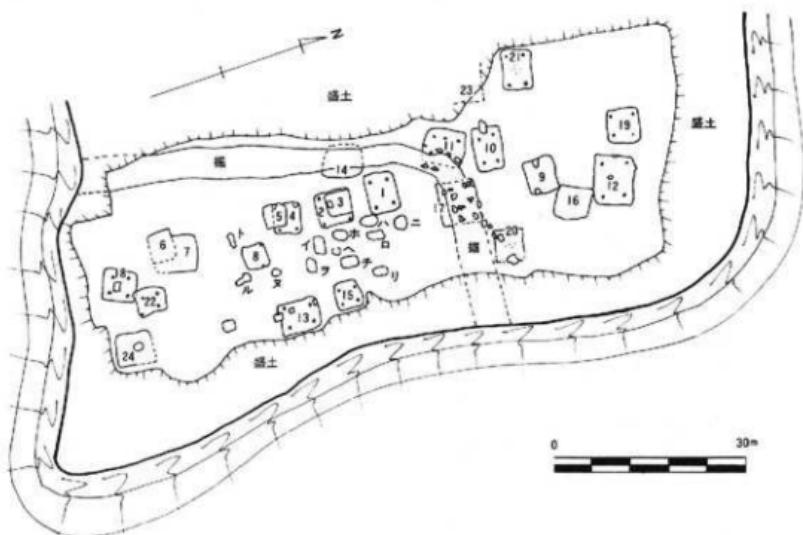


図16 発掘区遺構全測図

第III章 弥生時代の遺構・遺物

第1節 遺構

発掘区域2700m²の全域にわたって展開し、集落形態を保った状態で発見されたが、集落全戸を露呈させることは予算の制約上でき得なかった。後述する平安時代住居址群と複合していたが、弥生時代竪穴住居址群17軒は、台地の南端から北端にかけてほぼ一列に並びその中央部に土壙群が位置していた。(図18)

1. 住居址

詳細は第1表に掲げてあるのでその概要について述べたい。各竪穴の規模、構造、切り合い関係や出土した土器を検討した結果、およそ次のように前後関係を持つ4群に分類することができた。

A群 第1号址、第4号址、第15号址、第21号址。

B群 第12号址、第13号址、第16号址。

C群 第7号址、第14号址、第17号址、第20号址、第23号址。



図17 遺構群全景 住居址群と土壙群（南より撮影）

D群 第11号址、第18号址、第2号址、第19号址。

但しC群のうち、第14号址、第17号址、第20号址、第23号址は、中世造構による搅乱や1部分発掘のみに終ってしまったため推定の域にとどまる。土器破片等が有力な資料であり今後訂正を要するかも知れない。

住居址のプランや施設に見られる特徴を要約して述べその概要を記すにとどめたい。(第1表参照)

A群は隈丸長方形プランを主体とし、他の群に比較してやや大形な傾向であるが、小形の竪穴式住居とペアを構成する。主柱穴は4箇で、床面中央に小ピットが一列をなして並列している第1号址(図20)の如く内部の間仕切施設を思わせるものもあり、第21号址の如く周壁の1部に周溝をもつものもある。遺物は、高环・环・壺・甕・鉢の組み合せが一般的で、石斧の保有率も高い。

B群は、長方形プランが一般的であるが規模はやや大形となり一辺7mを越すものがある。主柱穴は4箇であるが第13号址の如く竪穴内床面の中軸に沿って小ピットが一列に並ぶ例(図26)もあるし、また第21号址(図22)の如く隈丸方形プランで主柱穴は同じく4箇で、床面の東面方向に対角線状に小ピットが配列されるものもある。遺物は、鉢・甕が多く壺は少なく鉢が最も卓越している。また石製紡錘車を出したのもこの群の第11号址、第12号址である。

C群は、隈丸方形もしくは方形が主で主柱穴は4箇で一辺6m内外に規模が揃ってくる。

第18号址の如く(図22)北方に張り出し部をもち中軸に沿って小ピット列が並び中心より南壁よ

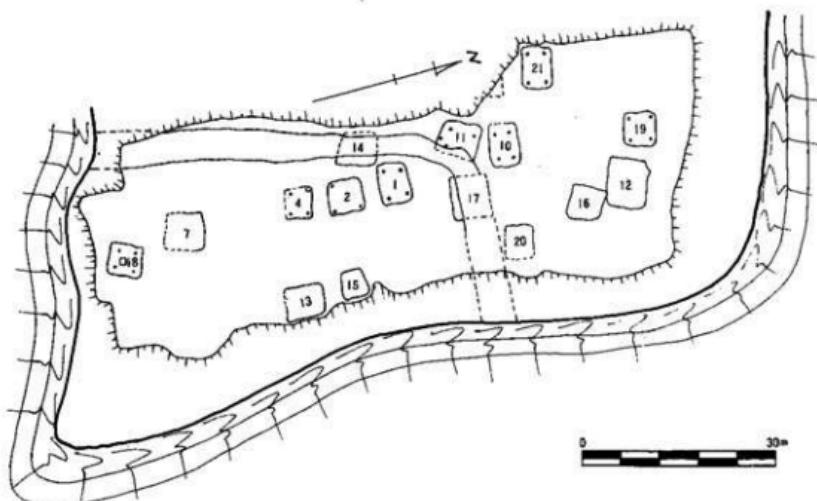


図18 弥生時代造構全測図

第1表 弥生式住居址一覧表

番号	住居址	プラン	法量		柱穴	周溝	埋甕	遺物
			東西×南北cm	標高cm				
20	1号	方形	615×521	20	主柱穴4 中心にピット列	なし	東壁より中央甕1 住居址中央部に焼土あり	弥生式甕1、甕3、壺3 石斧5、鉄片
26	2号	隅丸方形	566×545	32	主柱穴なし 小ピット6 (中心に1列)	なし	東壁より中央甕1	甕1、壺1(底6)
24	4号	方形	580×420	28	主柱穴4 小ピット3	なし	東壁より中央甕1	鉢3、壺1、高環1 石斧1
24	7号	隅丸方形	推定 630×600	26	主柱穴2 小ピット	なし	西壁中央甕1	鉢4、壺2、甕2 石斧2、四面1
20	10号	方形	680×450	25	主柱穴4 間隔3m 他小ピット	なし	東壁より中央甕1	鉢、石斧1、磨石3
22	11号	方形	不明×678	36	主柱穴4 小ピット13	なし	西壁より中央甕2	筋縫車(石)
26	12号	方形 (大形)	778×650	48	主柱穴4 ピット	なし	東壁より中央甕2	鉢3、甕1、筋縫車1 磨石2、石斧
26	13号	方形	530×636	28	主柱穴4 小ピット15	なし	壺1 鉢1	壺1、鉢1
24	14号	方形 (推定)	不明×630	40	主柱穴1ヶ 確認	なし		壺1、甕1
20	15号	方形 (6mに近い)	480×470	36	主柱穴4 ピット多数	西側に南北に走る巾40cmの溝あり	壺1	鉢1、瓶1、高環1 刀子1
22	16号	方形	480×550	14	主柱穴2 数個のピット	なし	北壁より1m30cm 甕1	鉢2、甕2、鉄鏡
24	17号	方形	680×565	44	主柱穴1	南壁北壁一部に 周溝		中世の漆の擾乱
22	18号	方形	536×560	45	主柱穴4	なし	北壁中央より甕1	鉢4、壺1、石製碇
24	19号	方形	520×650	52	主柱穴4 柱穴プラン 小判形	西壁により溝あり	北壁中央部に甕1 甕1	鉢4、壺1、石斧2 磨石1
22	20号	方形 (推定)	600×470	18	主柱穴不明 中央部に ピット数個	なし	なし	鉢5、壺1
20	21号	隅丸方形	620×512	50	主柱穴4	南北壁の一部に 周溝	西壁中央より甕1	鉢3、壺1
	23号	不明	不明					壺1

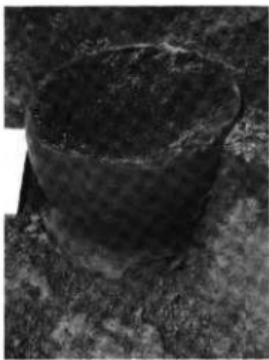


图19 弥生時代整穴式住居址内埋磨炉（上·中 11号址 下左 21号址·右 12号址）

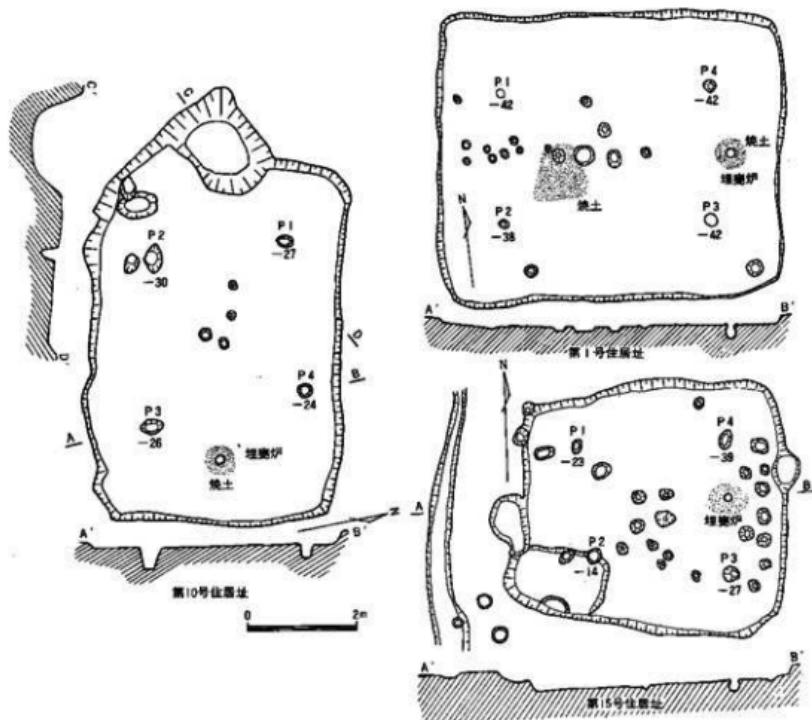


図20 弥生時代竪穴住居址実測図(II)

りに一辺1.5m内外の小竪穴が床面より深さ20cmほど掘られ配環造構を持つものもある。遺物は鉢・壺・甕であるが鉢が卓越している。

D群は、竪穴の規模が一辺5m内外の方形プランでやや小形となり4柱穴であるが、第11号址の如く限丸方形を呈するものや(図22)、第2号址の如く周壁に沿ってその直下に小ピット列を配し、柱穴の認められないものもある。(図26)

遺物は、甕・壺・鉢があり、特異なものとしては、第11号址、第12号址より石製紡錘車、第22号址より石製碇を出土している。

以上17軒の竪穴式住居址について概観したが、共伴した土器を検討した結果、後述するように、すべて弥生時代後期に所属するもので、後期の最初頭から漸次新しい時期に向って、A→B→C→Dの順序に変遷したものと觀ることができる。細分された時期による住居形態の変化は、極めて僅かなものである。通有して持つ特徴としては、入口部の反対側の奥まった2柱穴間に、甕または壺を埋めて火炉として使用していることである。

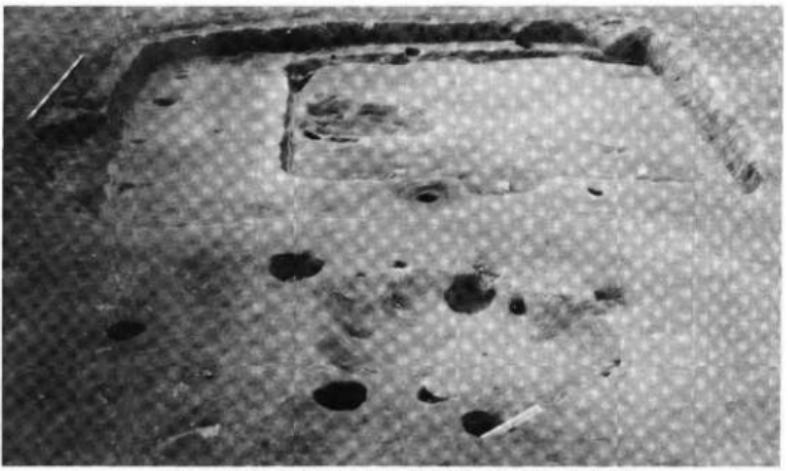
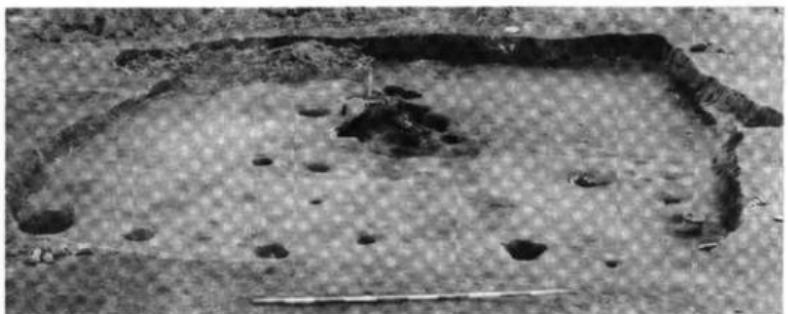


図21 弥生時代整穴住居址景観(1) (上1号址、中7号址、下2号址)

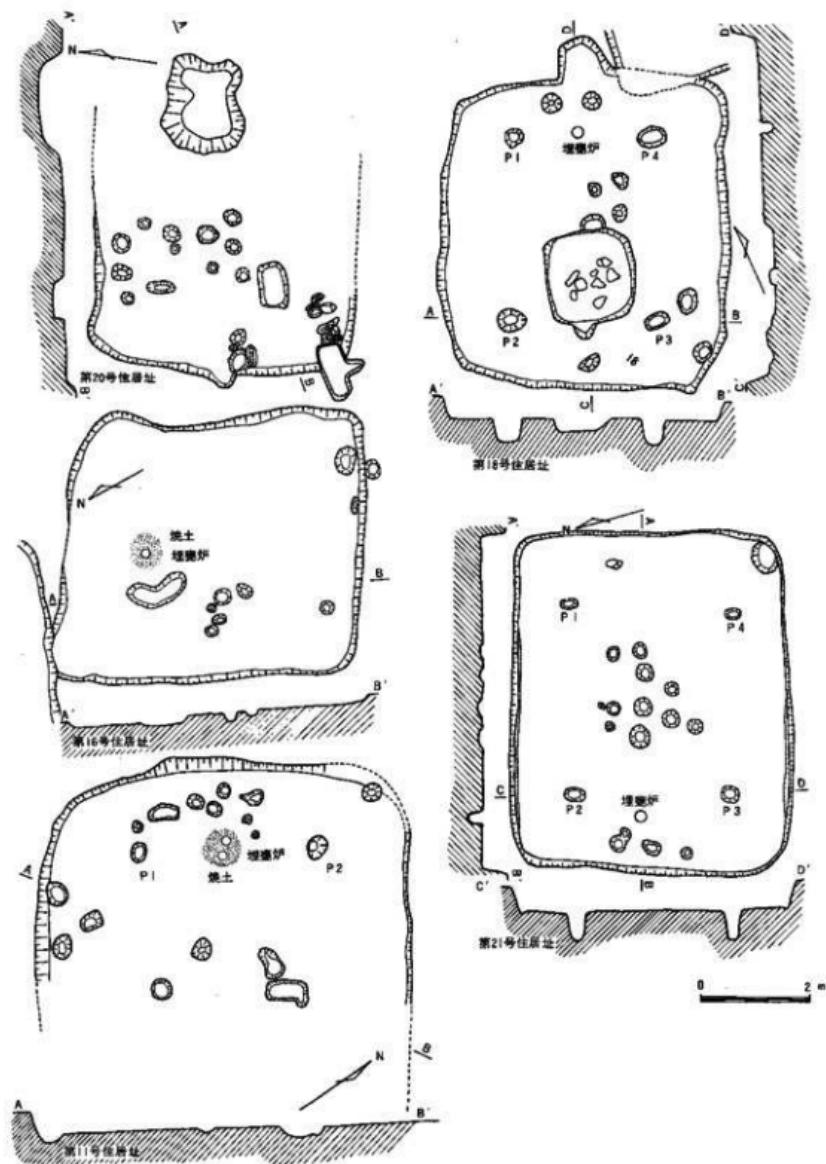


图22 新石器时代竖穴住居址实测图(2)

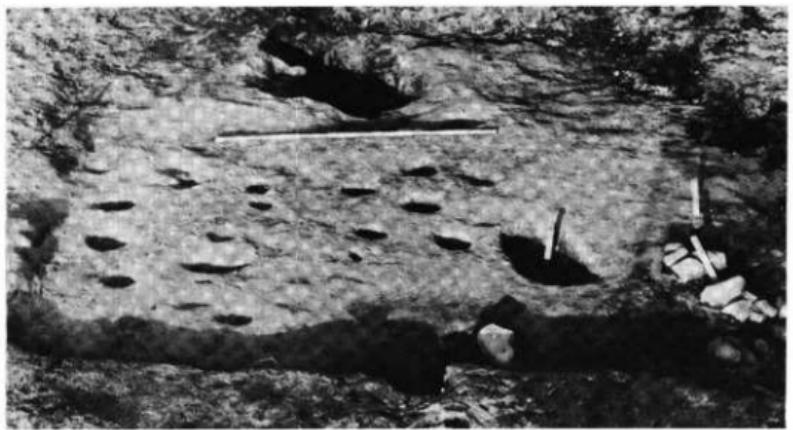


图23 弥生时代整穴式住居址景观(2)（上—12号址、中—18号址、下—20号址）

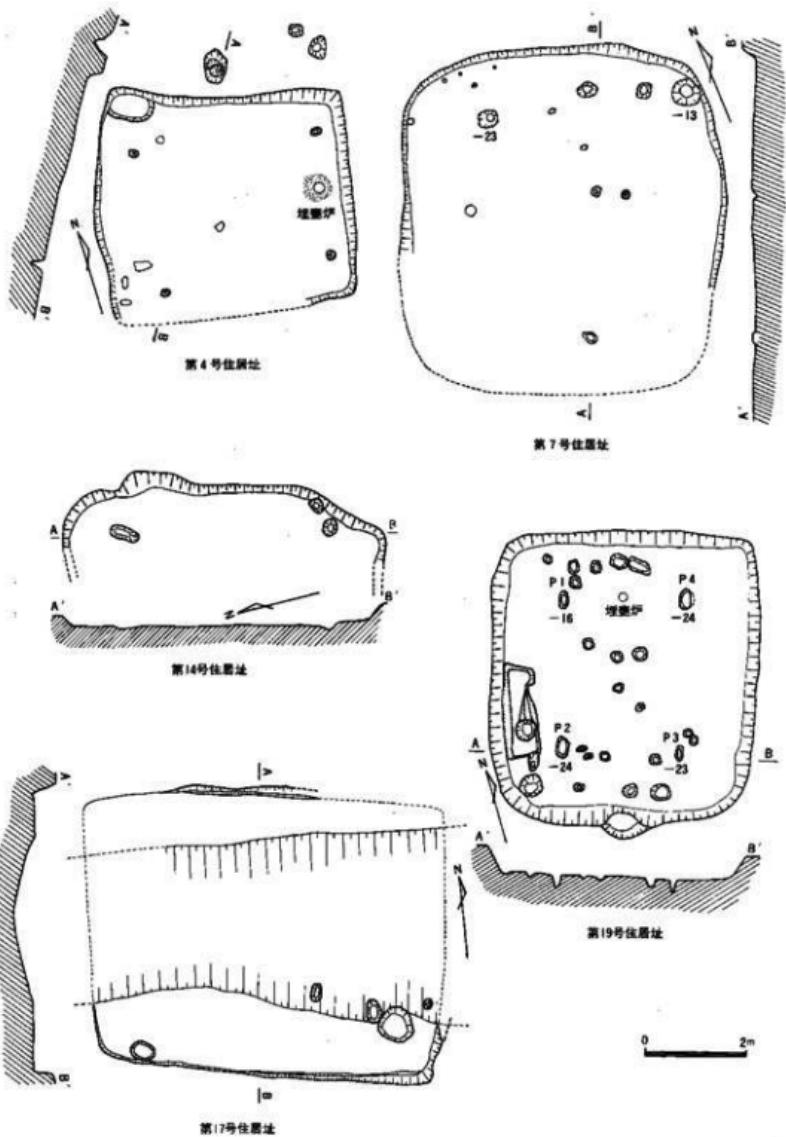


图24 弥生式時代墳穴住居址実測図(3)

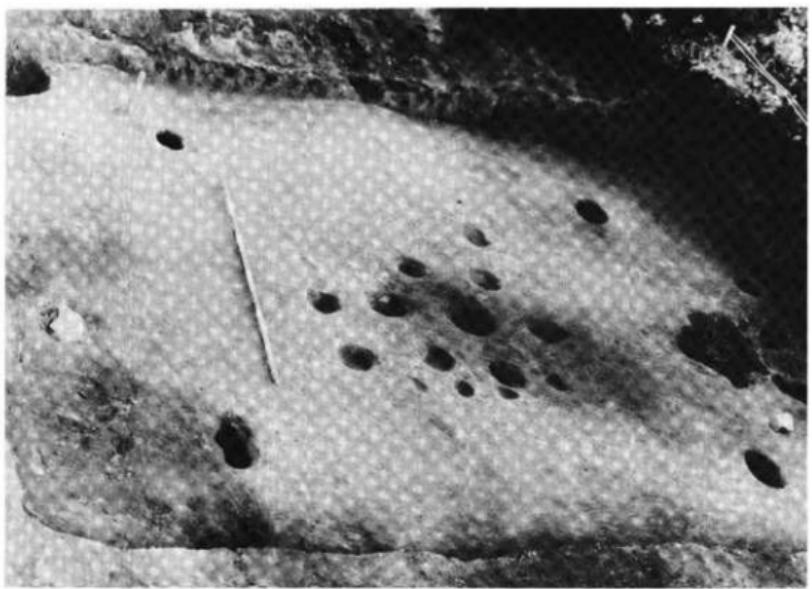


図25 新石器時代堅穴住居址景観(3) (上—19号址、下—21号址)

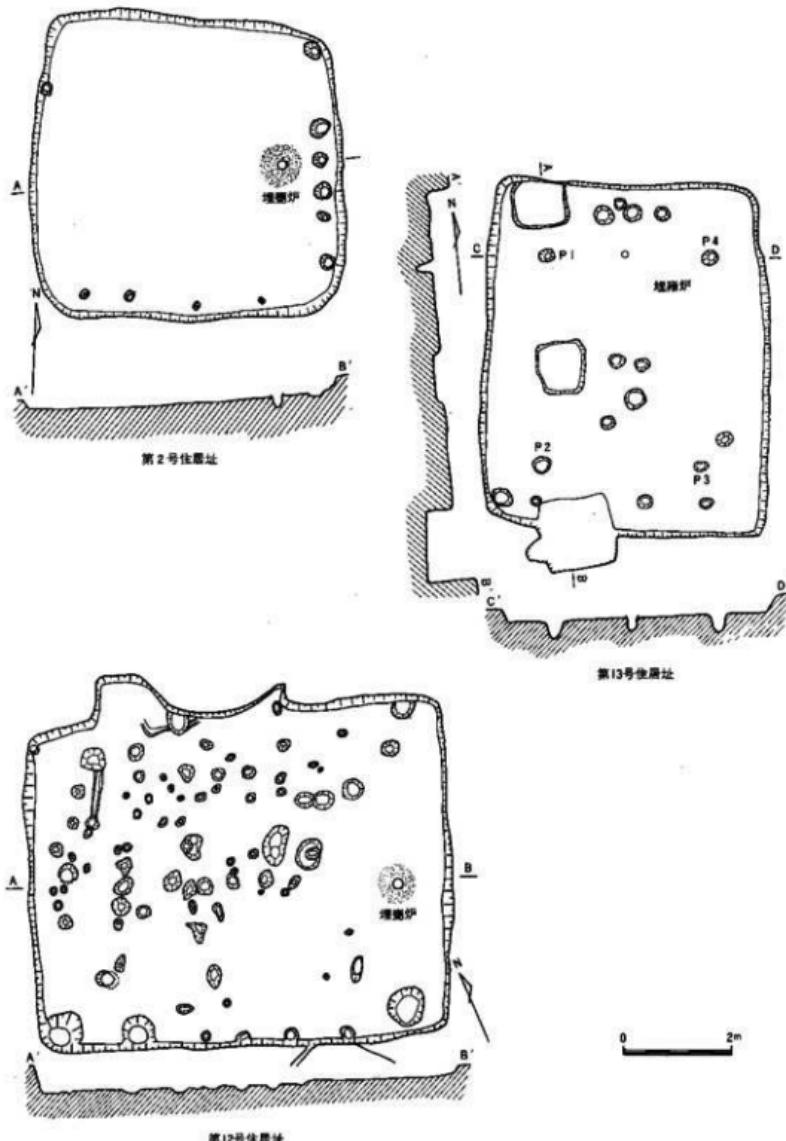


図26 張生式時代竪穴式住居址実測図(4)

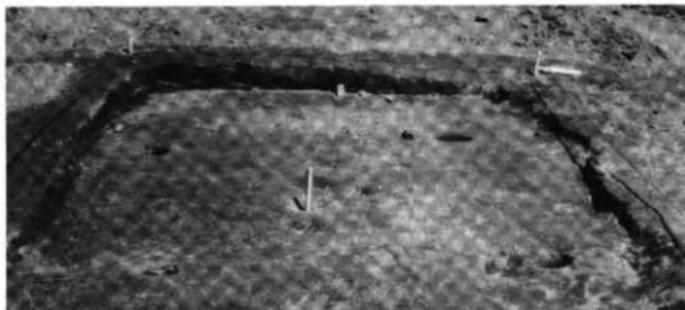
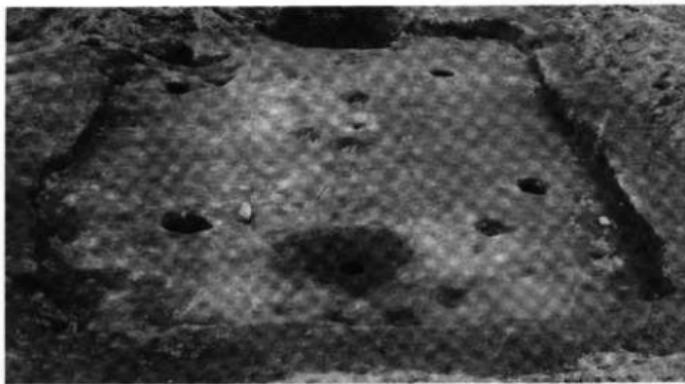


図27 弥生時代竪穴遺構景観(4)（上・中—10号址、下—土柱 イ号址）

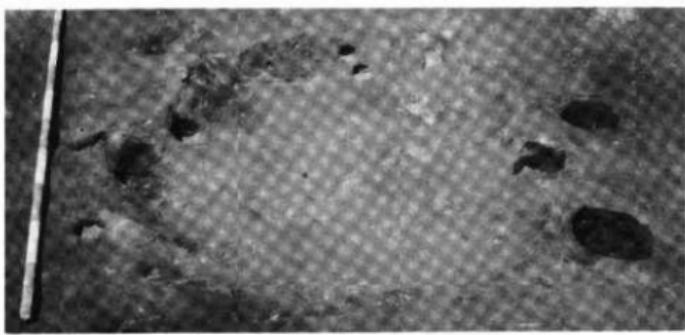
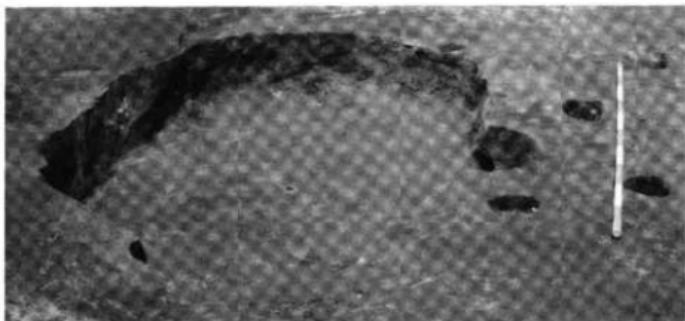


図28 弥生時代土埴（上一八号址、中一八号址、下一六号址）

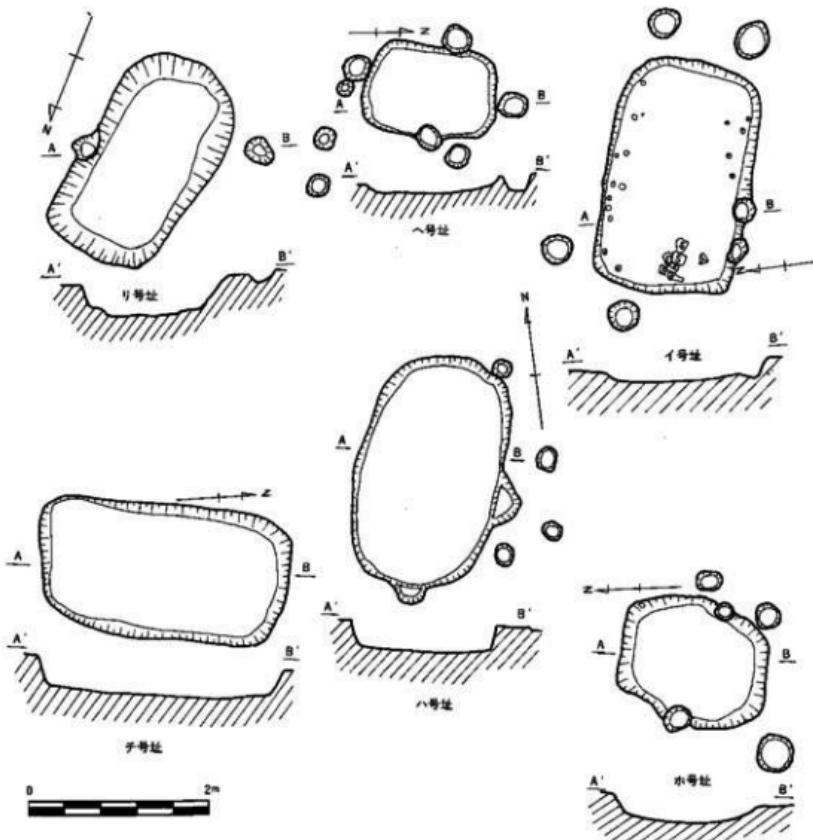


図29 弥生時代土塹実測図

2. 土 壤 群 (図27、28、29、30参照)

前述の住居址群の中央部東側に発見された土壌、イ号・ハ号・ホ号・ヘ号・チ号・リ号の6箇の土壌は、ほぼ網目しているので土壌群として捉えることができる。プランはいずれも長方形であるが、なかに4号の如く壁の外側に柱穴を配したものがある。遺物は少なく、図30、図41の土器と石器である。石器のひとつに大型の石鉗（41図の19、20）がある。チ号址の堆土の中間層位に包含され緊密穴の中軸線上の中央部に位置していた。土器は中期末葉に所属するものと後期最初頭のものがあり、住居址群より一時期先行するものと考えられる。各土壌配置関係は規則的な状態は認められず、順次掘られたものようである。これらの点から、墓壙として使用したものと推定した。（林 茂樹）

第2節 造 物

1. 土 器

出土した土器及破片は總體数で 100箇内外の数にのぼるが住居址内床面に埋蔵炉として使用された土器27箇の図上復元が可能となった。これらの詳細は「第2表」および図28~33に掲げたので一覧願いたい。

出土した弥生式土器は大別して次のように二分類された。

第1類土器は、壺・甕・高環・环・鉢が組み合さっており、土壤群またはその周辺から出土したもののが大部分(図30)である。

甕形七器の破片が多く、器厚5mm内外で、器面全体に条痕を口縁と平行あるいは直角に施したもの、途中から方向が一転して「く」の字形を呈するもの(6、8)がある。また口縁部に連続指圧の凸帶を付したもの(4、5)がある。また別に、LR方向の縄文を廻転施文し、その上に逆T字形に沈線で囲みその外周の縄文を磨り消したもの(1)極めて細かい沈線を横に引いたもの(10)などがある。これらの様相は、近くの遺跡に求めれば、飯田市恒川遺跡出土の土器に比定することができ、弥生時代中期末の所産と認めることができる。

第2類土器は、弥生式後期の前半から中葉にかけてのもので、A、B、C、Dの四期に区分する

第2表 弥生式土器要目一覧表

実測図 団番号 番号	写 真	出 土	位 置 イランの 中庭より	器 形	時 期 区分	法 量 cm 高さ 最大巾 厚さ	色 調	燒成	含有物 胎 土	施 文 (標目文)	備 要	
32 1	36-1	15	西 壁	壺	A	現高 30.0	幅 42.4	0.8	淡黄褐色	中位 反石粒	縹状文1段 波状文4段	2次焼成で赤色化部分 あり
32 2	36-3	4	東正中 (埋)	甕	A	口縁 12.0	20.0	0.5	赤褐色	上位 長石末	無文	器壁全面に繊状工具による調整あり
32 3	36-2	15	東 高 环	高 环	A	口 12.4	12.0	1.2	赤褐色 (朱彩)	上位 長石末を含む	無文	朱彩が顯著に認められる
33 4	36-5	21	西	壺 網以下欠	B	現高 13.6	幅 12.3	0.5	淡褐色	上位 長石	平行縷状2段	
33 5	—	21	西 (埋)	鉢 高台付	B	口 14.0	18.8	0.8	茶褐色	中位 長石粒を含む	波状2段 平行縷状1段	口縁に煤付着
33 6	36-8	1	東 (埋)	甕	B	現高 34.0	幅 23.6	0.9	赤褐色 (朱彩)	上位 長石末を含む	波状4段	内壁に格子目状
33 7	36-6	10	北 (埋)	甕 網下部欠	B	口 30.0	32.8	0.8	赤褐色 (朱彩)	上位 長石末を含む	縦波状文3段	内壁口縁部に横走する崩毛目あり

34	8	37-9	12	正中東 (埋)	裏	C	28.4	口 20.0	0.5	淡褐色		長石粒	波状3段	内面口縁部にハケ目を付す
34	9	—	2	正中線更 (埋)	裏 口縁 (埋)矢く	C	現高 14.0	胴 22.4	0.7	淡褐色	中位	砂長石を含む	波状3段	内壁にハケ目調整あり
34	10	37-10	13	北	裏	C	現高 18.0	胴 18.4	0.7	淡灰色	中位	砂長石を含む	波状文4段	内壁の調整は丹念に行なわれている
34	11	37-15	19	西 (埋)	裏 胸以下欠	C	19.0	口縁 18.0	0.7	明褐色	下位	長石粒	波状文2段	内壁は四凸調著である 胴上部炭化物付着
34	12	—	7	北 (埋)	裏 口縁 (埋)矢く	C	現高 13.0	口 22.2	0.7	赤褐色	中位	長石を含む	波状3段	内壁口
34	13	—	13	北	裏	C	現高 9.0	胴 20.8	0.6	淡褐色	下位	長石を含む	波状2段	
34	14	—	7	西 壁	裏	C	13.0	17.5	0.5	明褐色	上位	長石、雲母末	無文	口縁より炭化物10 垂下
34	15	—	7	西 (埋)	裏	C	現高 4.0	胴 10.0	0.5	褐灰色	中位	長石粒	不明	内、外壁とも攝目に調 整あり
34	16	—	7	西	壺	C	現高 3.0	底部 6.6	1.0	暗灰色	中位	長石粒	不明	底部内面にけずりあり
35	17	37-11	19	北	壺	D	32.0	胴 24.0	0.9	淡褐色	上位	細長石粒	波状4段	内部に横方向ハケ目、 指整形あり
35	18	—	19	北 (埋)	裏	D	現高 15.0	胴 19.2	0.8	淡褐色	下位	長石粒	不整波状3段	内面は輪横みで指とハ ケで整形
35	19	—	19	北 (埋)	裏	D	現高 15.0	口縁 19.0	0.7	明褐色	下位	長石粒	波状3段	内壁輪づみ 輪著
35	20	37-12			裏	D	14.0	口縁 13.0	0.6	褐色	中位	長石粒	波状3段	内面調整、口縁部に攝 付着
35	21	—	18		壺	D	12.0	胴 12.0	0.4	黑褐色	上位	長石 雲母末	無文	高台付無花果型壺か
35	22	—	16	北 (埋)	裏	D	23.4	胴 16.4	0.6	淡灰色	中位		波状文4段	内壁に平行した輪横あ り
35	23	37-14	11	西 (埋)	裏	D	現高 14.0	胴 26.0	0.7	淡褐色	中位	砂長石を含む	波状3段	炭化物が胴より下に付 着、内壁にハケ目あり
35	24	—	16	北 (埋)	裏	D	現高 15.0	口縁 21.0	0.8	淡褐色	中位	長石粒	波状3段	波状の最下段は部分的 に難文



図30 出土土器片拓影(I)

ことが可能である。特に各竪穴住居址内部床面下に設けられた埋甕炉として使用された變形土器27箇があり變形土器の変化を捉えることが可能なのでこれを主体として区分を行なった。詳細は「第2表」によって観察されたいが、これを要約すれば次のようになる。

A類 (図30, 31, 32)

器種は、甕・壺・鉢・高杯が組み合わさっている。甕においては、断面器形は底部から胴部にかけてスムーズに膨み、口縁部の立ち上がりがゆるやかな「く」の字状に外反するもので、口縁部の下に3段内至5段の細い櫛状工具による波状文を重ねその間に平行簡目文または半円弧文を加える場合がある。

B類 (図33)

甕・壺・鉢・杯などが組み合わさっているが甕においてはA類に較べ器形は胴部の膨みが増し、

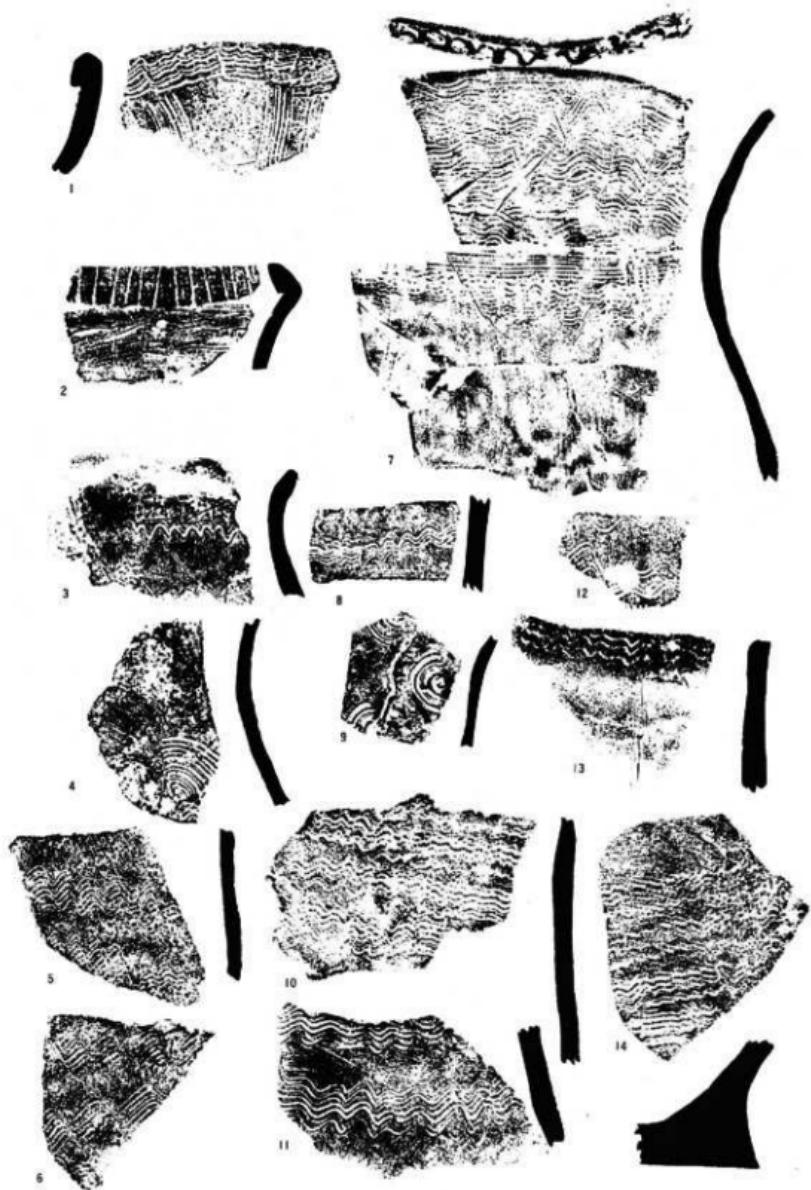


图31 阳生式土器拓影(2)

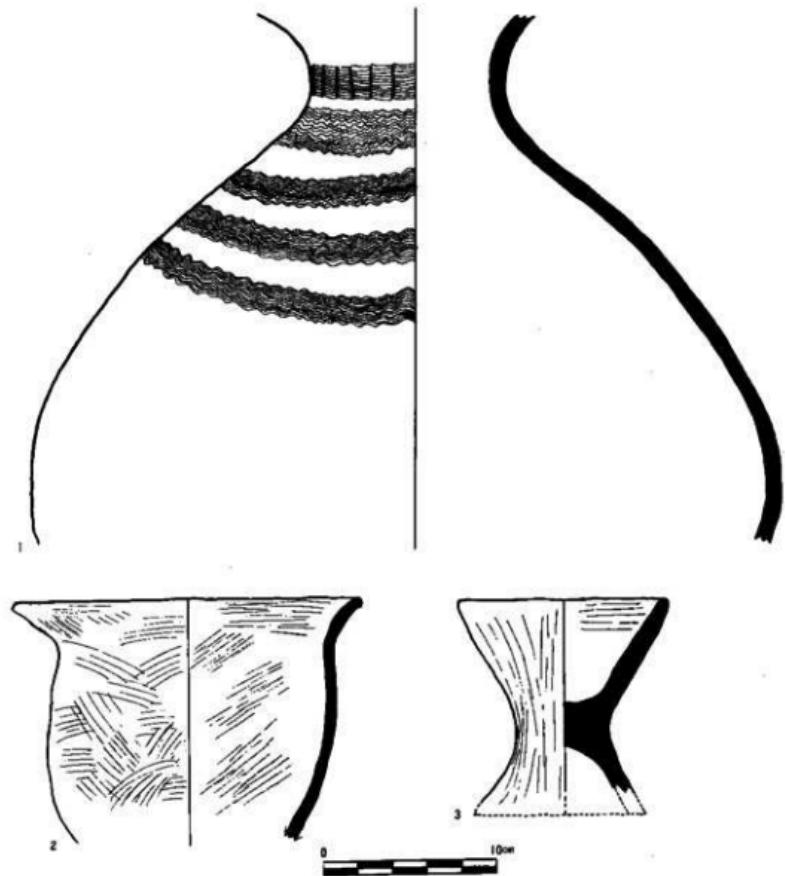


図32 弥生式土器実測図(I)

頭部以外の櫛目波状文は3段乃至4段に減り、施文がきわめてシャープで規則的になるもの（7、9、10、11）と浅くゆるやかになるもの（5、12、13）とがあり、時に高台が付されるもの（3）がある。時に無文の甕が現れてくる。

C 類 (図34)

鉢が主体となり甕、壺、高环が組み合わさるが、甕においては、前A、B類に較べ器高が増し頭部の位置が上位に移り、口縁部が角ぼり、櫛目波状文が乱れてゆるやかとなり、施文が浅く消極的な様相を帯びる一方高台付のものが現れたり無文の小形甕が増してくる。

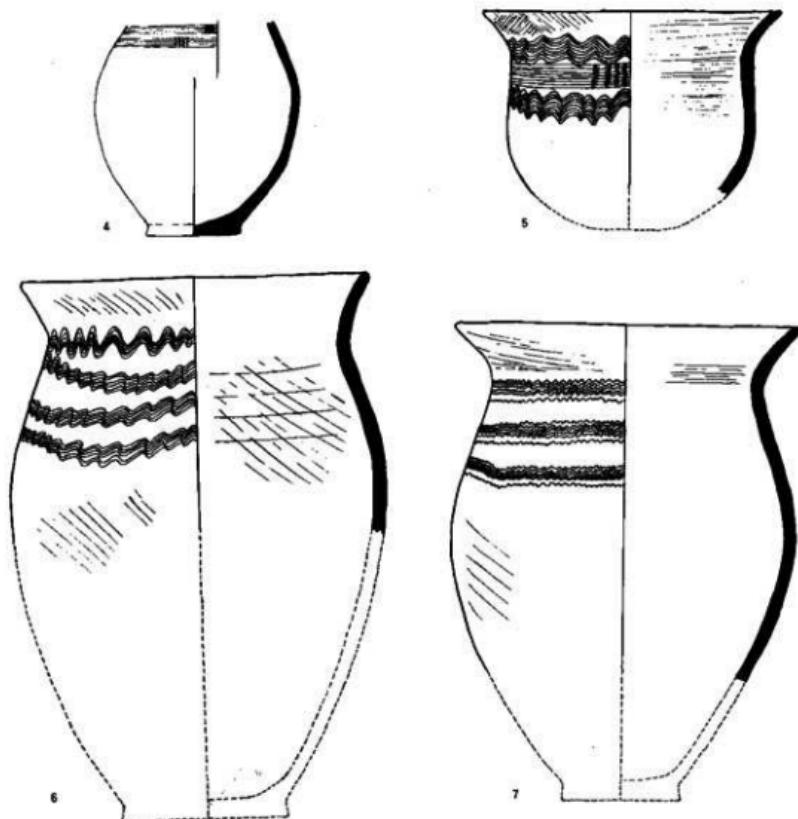


図33 出土弥生式土器実測図(2)

D 類 (図35)

鉢・壺・壺が組み合わさるが、鉢が卓越してくる。器形の特徴は胴部の膨みが著しく張り、頸部以下に大形の横目波状文と簾状文を並行して施すものがある。これに伴う壺形土器の口縁部は直角に立ちあがり二重口縁状を呈してくる。またなかに口縁部外側に刻み状の沈線を並列させて施文するものがあり、後期後葉の中島式の器形や特徴と類似してくるようになる。

2. 土 製 品

土製紡錘車3点がある。第12号址および第22号址から出土した。(図44の32)は直径4.0cm厚さ2.1cmで断面形は矩形を呈し中央に径2.1cmの直孔が穿っている。焼成は固く焼き堅められており、胎土は弥生式土器と全く同一の状態で淡褐色を呈する。

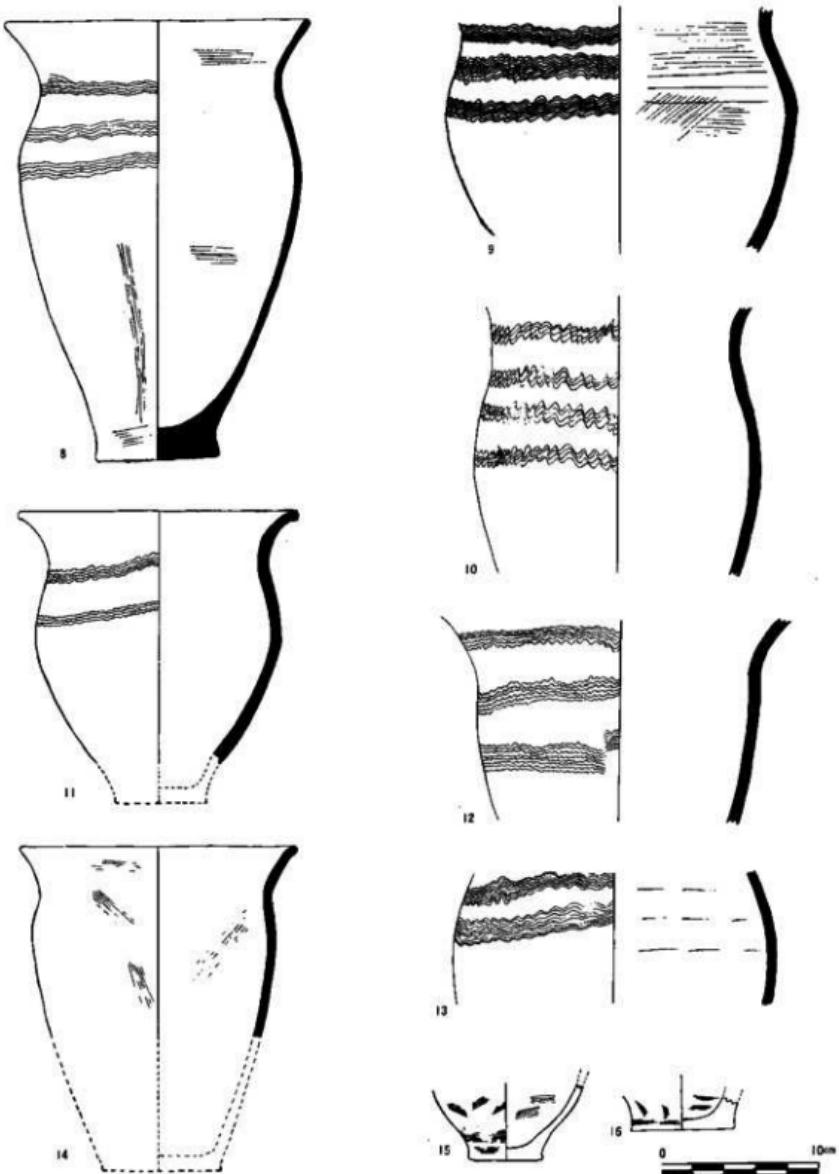


图34 弥生式土器実測図(3)

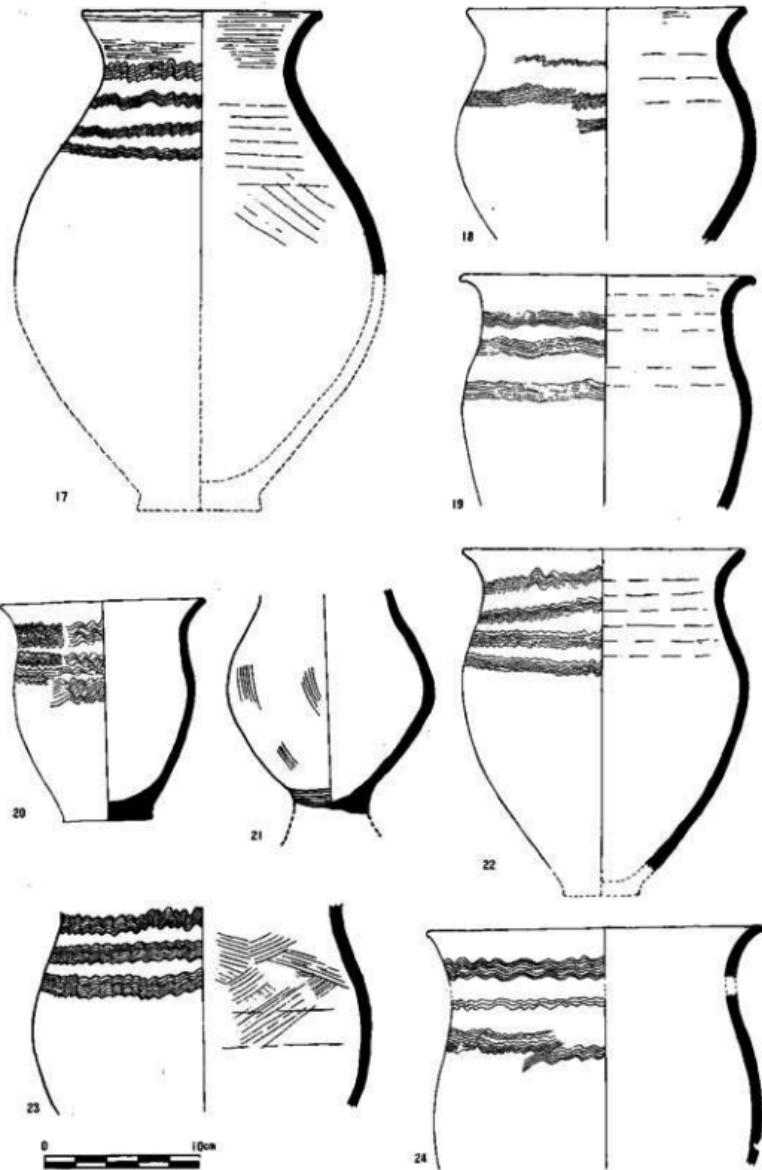


图35 张生式土器实测图(4)

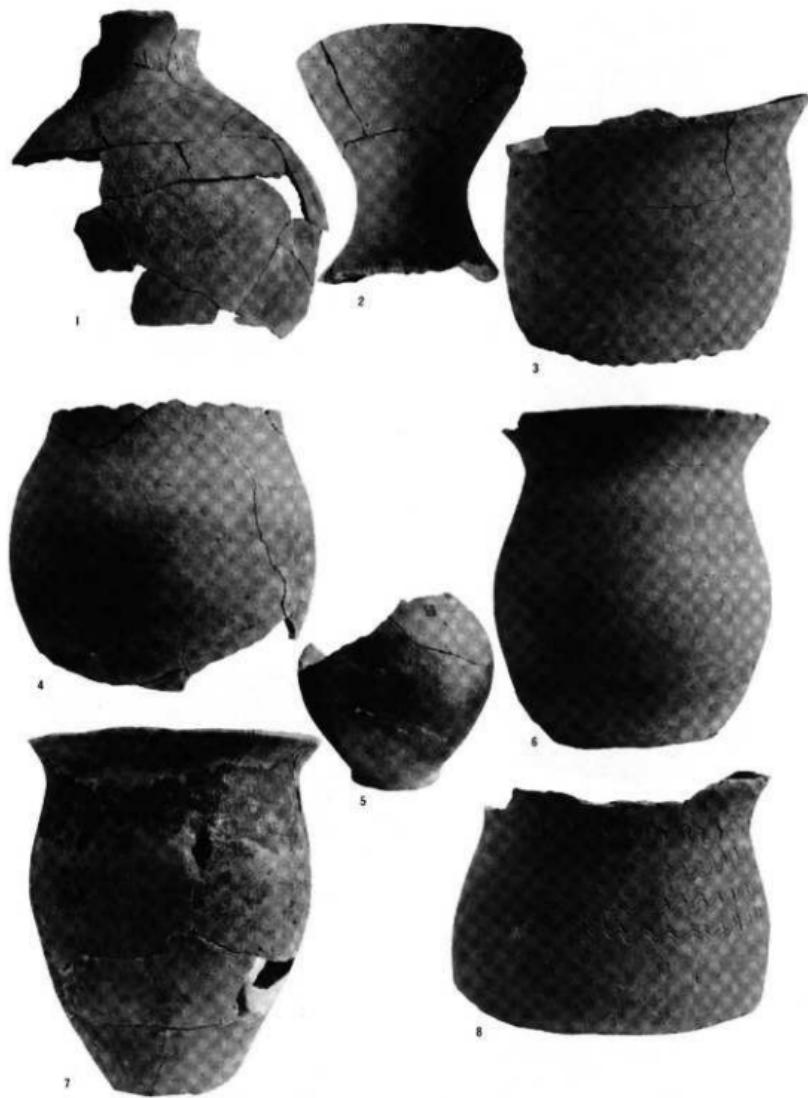


图36 出土弥生式土器(1)

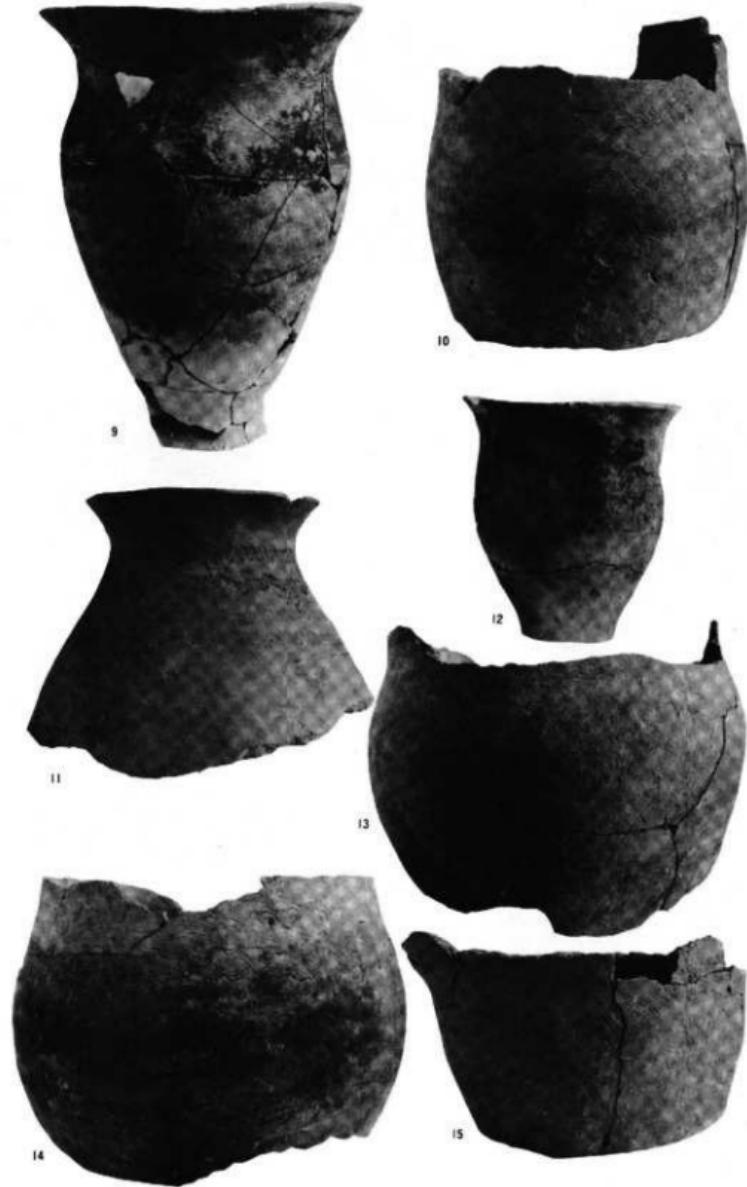


图37 出土弦生式土器(2)

3. 石 器

弥生時代の遺構から出土した石器は総数33点を数えた。その内訳は、石斧10点、横刃形石器及異形石器8点、石鍬形石器2点、凹石1点、敲石3点、磨石2点、磨製石鏡2点、紡錘車2点、碇形石器1点である。

石器はいずれも打製品が多く形態も齊一性に乏しい。特に当然出土しなければならない筈の磨製有孔石庖丁は全く認められない。これに代るものとして打製の剝片に近い丈のみじかい横刃形石器が多い。

横刃形石器（図40-7～14）にかかげたものがこれである。粘板岩や硬砂岩の厚さ1cm内外の剝片を整形して1側辺に刃部を作出しており、両面は第1次剝離のままである。いわゆる打製石包丁に属するものと思われる。基本的な形態を持つものは12のみで他は両側に挿入部をもたない異形のものであるが刃部は石包丁としての機能をもっている。

石斧（図39-2、4）に示した。扇状石斧2点、横刃形石器1点（図38）、棒状磨製石器1点（図39-5）、丸鑿形石斧3点（図41-15～17）、銀形石器2点（図41-19、20）、計10点を数える。

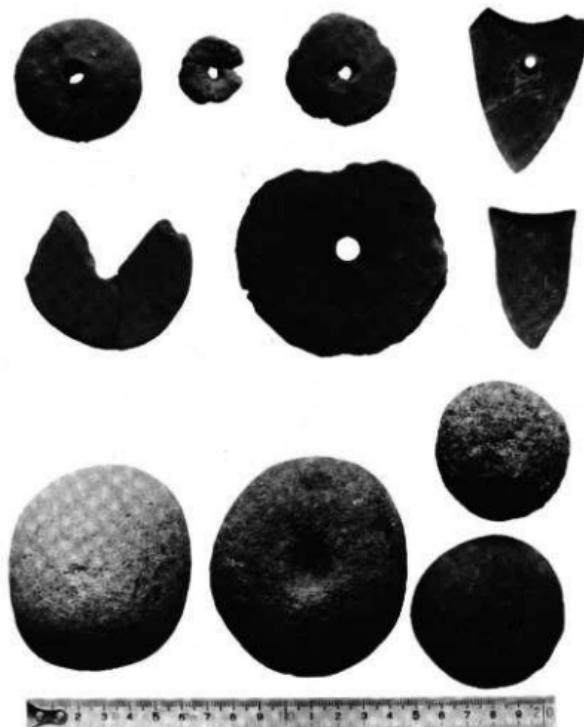


図38 出土石器写真（上一土製及石製紡錘車、石鏡、下一磨石及凹石）

第3表 出土石器要目一覧表

図版	No.	名 称	大きさ cm			重量 g	石 質	調 整	特 徴	住居址	写 真
			長 さ	最大巾	厚 さ						
39	1	短彎形石斧	12.4	4.2	1.0	90	粘板岩	両面打製	刃部磨滅	1	43-7
39	2	撥形石斧	10.2	6.4	1.4	100	粘板岩	両面打製	刃部先端にあり	1	
39	3	短彎形石器	7.4	3.1	0.9	25	粘板岩	両面打製	刃部側面近辺と直角に使用痕あり、撓曲具か	1	43-5
39	4	撥形石斧	11.8	7.4	2.6	300	硬砂岩	両面打製	刃部磨滅	12	
39	5	棒状石斧	11.2	4.2	2.8	200	綠泥片岩	敲 製	刃部磨滅、蛤刃、使用痕あり	19	43-6
39	6	半月形石斧	9.8	5.2	1.6	150	粘板岩	両面打製	刃部は先端から右側邊にあり	16	
40	7	横刃形石器	10.2	4.6	1.0	40	粘板岩	両面打製	刃部は両側邊にあり	9	43-8
40	8	横刃形石器	9.6	5.0	0.8	50	硬砂岩	片面打製	刃部は両側邊にあり	12	43-3
40	9	横刃形石器	8.0	3.8	0.8	25	粘板岩	局部磨製	刃部は右側邊にあり、撓曲具か	13	
40	10	横刃形石器	9.8	3.8	1.1	50	粘板岩	両面打製	刃部は両側邊にあり	1	43-9
40	11	横刃形石器	8.2	4.2	1.2	50	硅 岩	両面打製	刃部は左側邊にあり	1	43-4
40	12	横刃形石器	10.0	5.4	1.6	100	硬砂岩	打製自然面	刃部は右側邊及び先端部にあり	22	43-2
40	13	横刃形石器	6.0	12.4	2.0	200	硬砂岩	打製自然面	刃部は右側邊にあり使用痕を残す、火熱酸化	13	43-1
40	14	屬影石器	7.6	12.6	1.4	200	綠泥片岩	打製自然面	刃部は両側面にあり、刃部形状を呈する	10	
41	15	丸鑿形石斧	19.6	9.0	3.8	100	粘板岩	打 製	片刃で丸鑿状刃部を形成している	6	
41	16	丸鑿形石斧	20.4	10.4	3.2	750	粘板岩	打 製	片刃で丸鑿状刃部を形成している	4	42-5
41	17	丸鑿形石斧	20.8	8.4	3.0	630	角 岩	打 製	片刃でやや丸鑿状部を形成している	13	42-4
41	18	丸鑿形石斧	—	—	—	300	硬砂岩	打 製	自然石で刃部のみ打製片刃の無い刃を作っている	12	42-2
41	19	擦形石器	26.0	10.4	5.0	1,600	硬砂岩	自然面	刃先端に打撃痕あり、片面全体に磨耗あり、火熱	15	43-11
41	20	鐵形石器	29.2	19.4	5.0	1,800	硬砂岩	自然面	刃先端に打撃痕あり、両面に磨耗あり、火熱	千号	43-10
44	21	石製紡錘車	推定 径5.0	穴の径 0.6	0.6	15	粘板岩	磨 製	片面より突孔径5mm	11	38-上
44	22	石製紡錘車	推定 径6.5	穴の径 0.8	0.5	20	粘板岩	打 製	片面より突孔径8mm	12	38-上
44	23	凹 石	7.5	7.5	3.6	300	硬砂岩		磨石で両面に凹あり 径3.5mm、火熱	6	38-下
44	24	敲 石	8.0	5.4	5.4	350	硅 岩	磨 製			
44	25	敲 石	7.6	7.6	5.4	400	硬砂岩	磨 製	両面中央部にくぼみあり	2	38-下
44	26	磨 石	9.0	9.0	5.0	430	硬砂岩	磨 製	火熱を受けている、もろい	12	
44	27	磨 石	5.6	5.6	2.4	100	硬砂岩	磨 製	火熱を受けている	10	38-下
44	28	磨 石	5.4	5.4	4.0	100	硬砂岩	磨 製	火熱を受け赤変している	10	
44	29	石 刀	7.2	2.2	0.8	15	硬砂岩	磨 製	刃の先端部分である、片刃		
44	30	石 鐵	3.5	2.7	0.3	—	粘板岩	有孔磨製	孔の径3mmよりの両端欠け	21	38-上
44	31	石 鐵	3.1	2.0	0.2	—	粘板岩	磨 製	五角形に近い形	21	38-上
44	32	土製紡錘車	4.0	穴の径 0.8	2.1	—	土 製				38-上
44	33	土製紡錘車	2.2	穴の径 0.3	0.6	—	土 製			17	38-上
44	34	土製紡錘車	3.7	穴の径 0.5	0.6	—	土 製				38-上
45	35	有肩石器	25.4	17.4	5.0	1,800	硬砂岩	自然面磨耗	全面磨損、先端部に火熱を受け変色している		
45	36	璇形石器	16.4	20.0	最小 9.0	6,900	安山岩	全		18	46

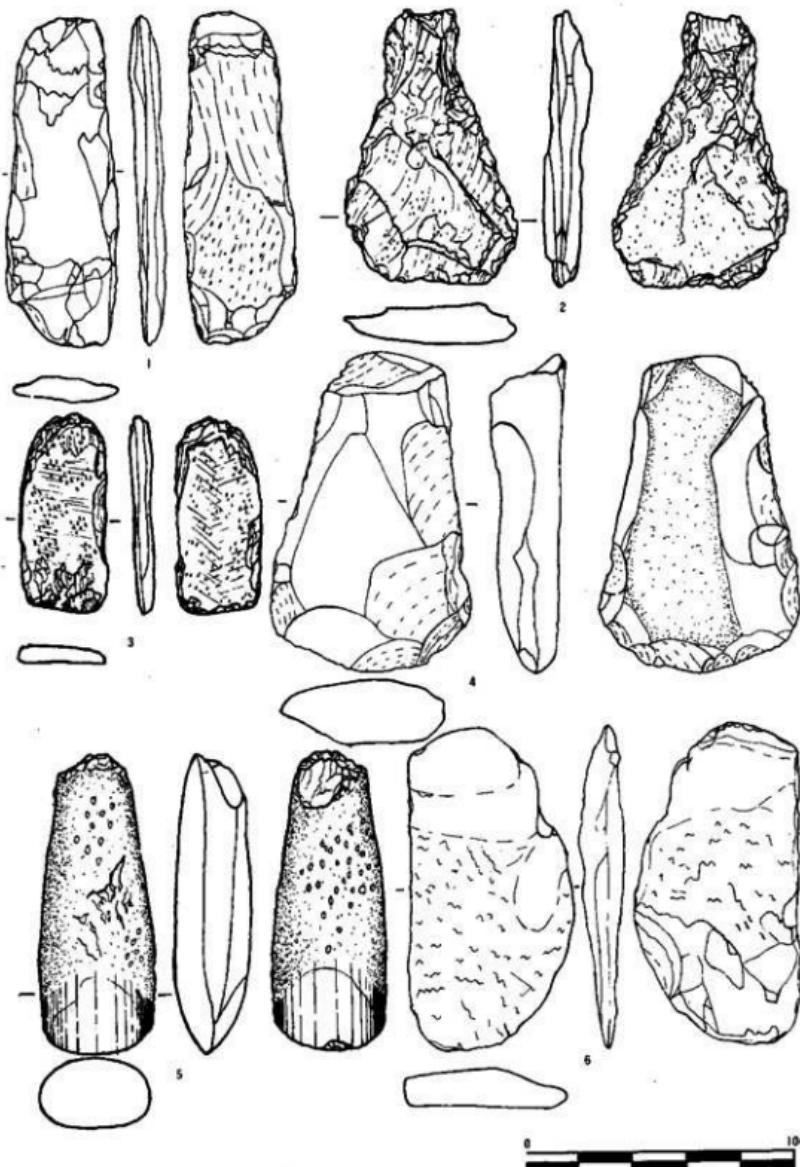


图39 出土石器实测图(1)

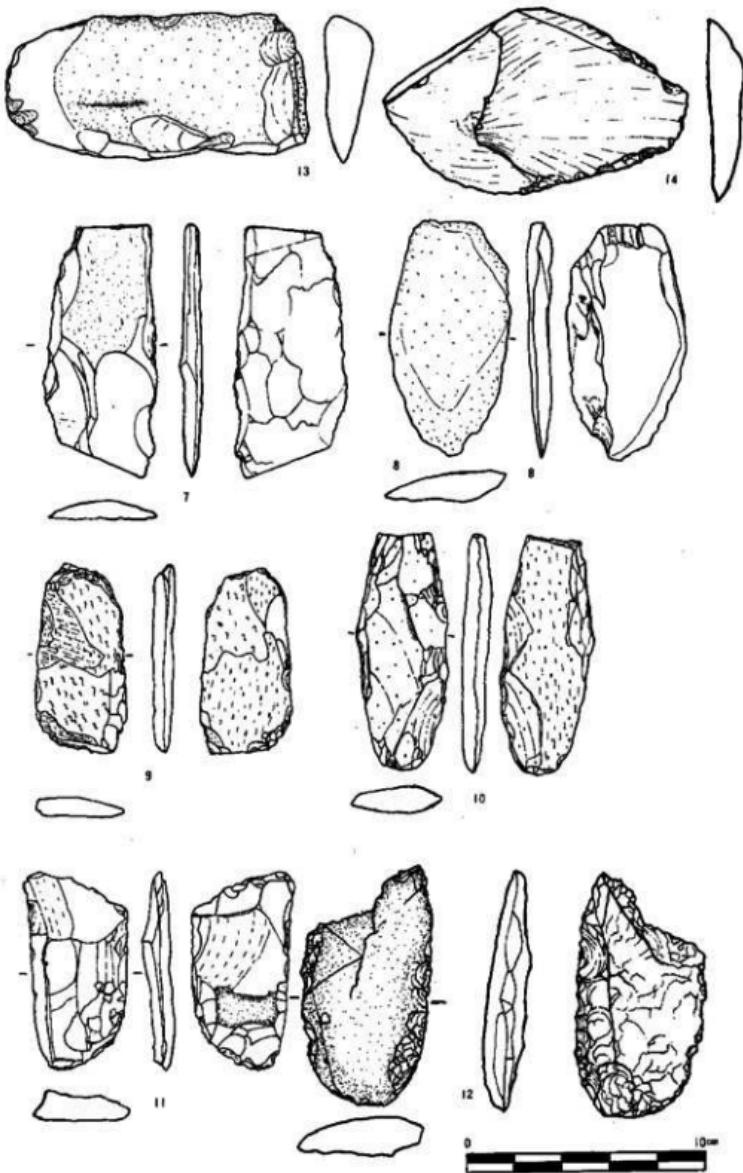


図40 出土石器実測図(2)

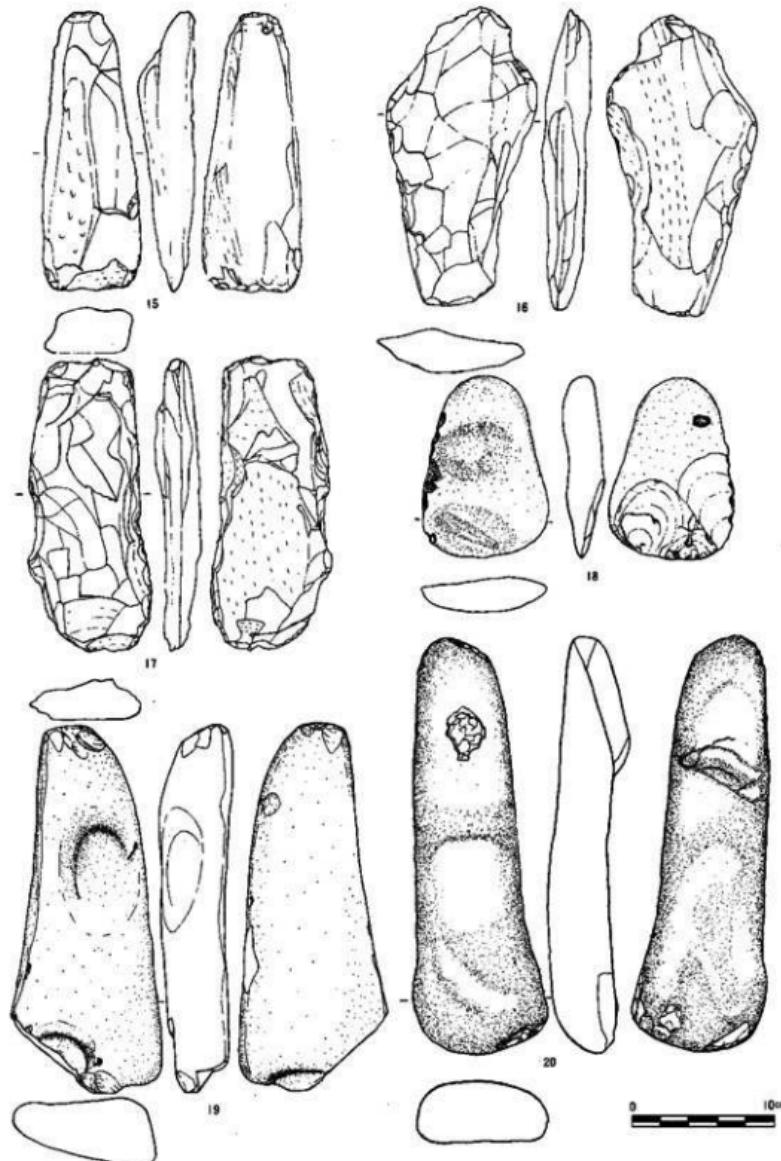


图41 出土石器实测图(3)

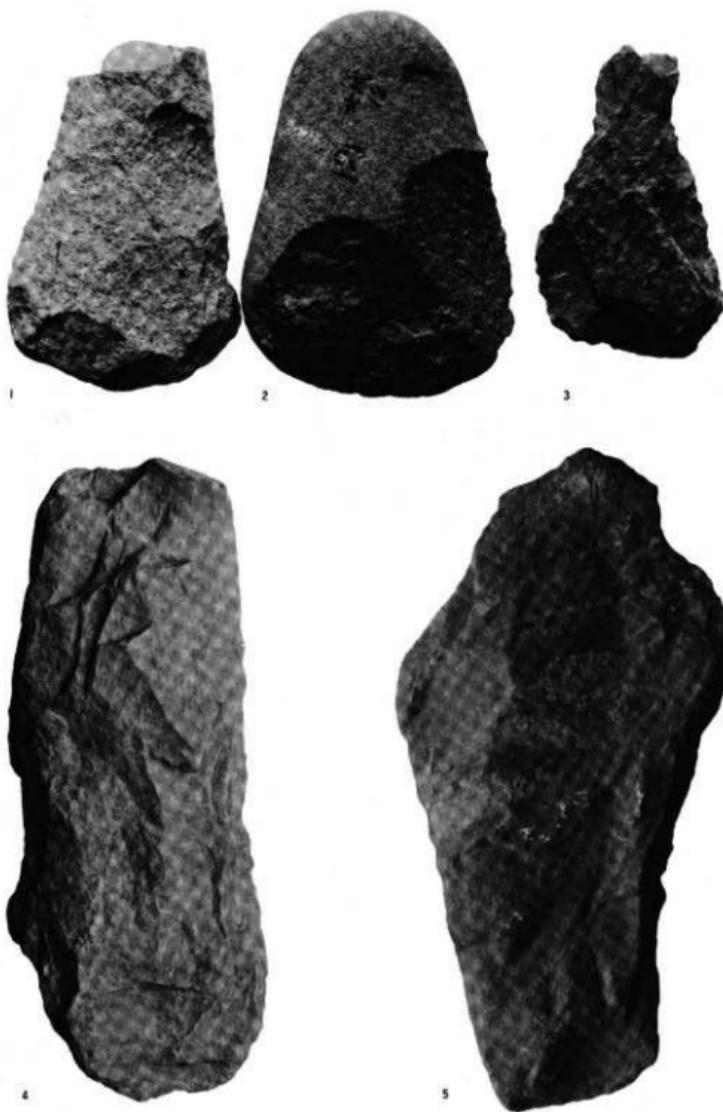


图42 出土石器(1) (上一擦形石斧 下一九瓣形石斧)



図43 出土石器写真(2)

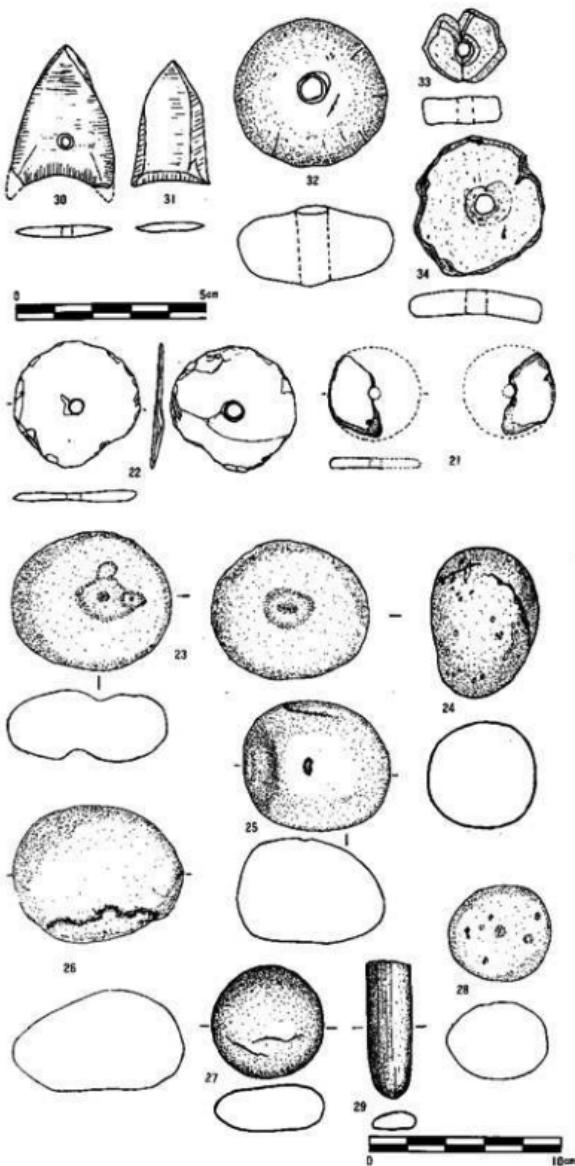
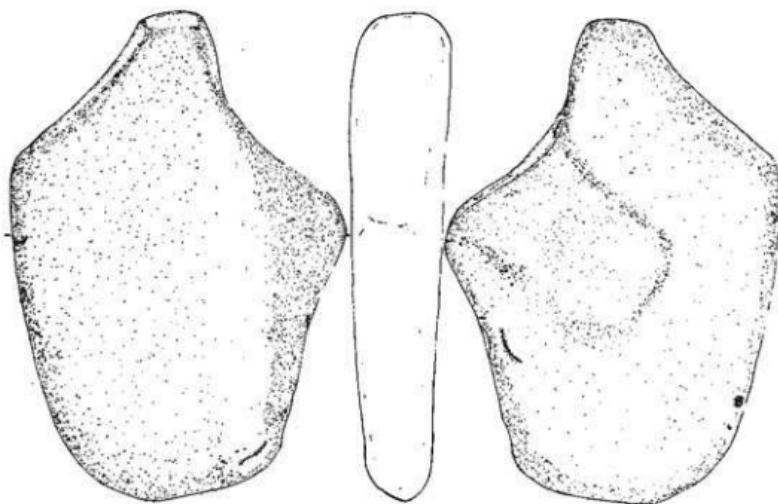


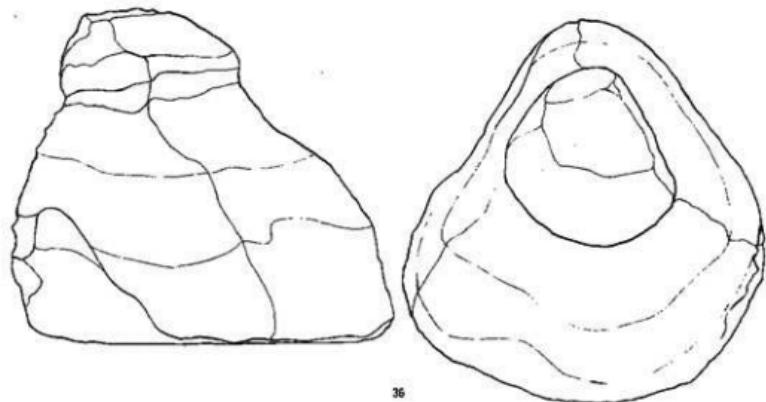
図44 出土石器実測図(4) 上一石針、纺錘車(32、33、34は土製品) 下一凹石、磨石、石刀



35



0 10cm



36

图45 出土石器实测图(5)



図46 石製 碗（弥生時代）

撥形石斧（図39）短彎形石斧（1）はいずれも全面打調により整形されており、棒状石斧は縄文時代の乳棒状石斧に類似する形態を持つが、基部を細かな打撃により調整している点が異なる。

（3）は極めて細いもので全面研磨され両端は鈍くなり、小さな打撃痕が認めらる。或は石器加工具であるかも知れない。

丸鑿形石斧（15、16、17）は極めて特徴的な石器である。16、17は大形で重量に富み、長さ20cm内外、巾12cm内外、重量 700g 内外を測る。材質は粘板岩及び角岩である。15はこれよりやや小形である。いずれも全面を打調して整形し、先端部にやや粗い丸鑿状の刃部を作出している。18は小形品で全面に自然面を残しているが一端に先端方向からの2回の打撃を加え刃部を作出しさらに細かい打調によって丸鑿状の刃部を作出している。この類は本遺跡出土の石器の中で最も注目すべき石器であろう。

石鋸形石器は2点あるが、長大な短骨形に近い自然石のもの（20）と基部と刃部に若干の打調を加えたもの（19）とがある。特に20はチ号小豎穴の中央部覆土中位から長軸を豎穴の中軸線と同じくして埋納された状態で出土した。この豎穴は周辺に柱穴が配され弥生時代の墓制にかかわるものではなかろうかと推定された遺構である。有肩石斧とした（35）も同様な性格をもつものであろうか。

有孔磨製石鎌2点（30、31）は緻密な粘板岩を材料とした中形の品で中央に径4mmの一孔を穿ってあり、31は三方の側邊に稜を整形してある。いずれも第21号住居址床面に存した。

敲石及び磨石は計6箇出土しいずれも硬砂岩製で重量400g～100gを測り、表面が火熱を受けて酸化しているものが多い。中に中央部を凹ませた磨滅痕をもつ凹石（図44-23）がある。

石製紡錘車は第1号址、第11号址から各1個が出土しているがいずれも粘板岩で中心部に径6mm内外の穿孔が施してある。（図44-21、22）他に土製紡錘車3箇が出土していることを付記しておく。（図44-22、23）

碇形石器は第18号址東壁よりの床面に安置された状態で（図10）出土したもので、安山岩を用い頭部が作出され頭部が鎧れて打調及び敲調により調整されている。縄文時代の有頭石棒をおしつぶしたような形態で、高さ16.4cm、底部径20cm、重量6.9kgを測る。（図45、46）

所謂、棒状頭鎧式石碇の範疇に属するものと解したい。

（林 茂樹）

第Ⅳ章 平安時代の遺構・遺物

第1節 遺構 (図48、49、50)

弥生時代の竪穴群にはほぼ平行して発掘区の中央部より南端部にかけて直線状に分布しており平安時代に設営されたと認められる竪穴住居址7基である。その一部は弥生式住居址と裁り合ったり、全く重り合うものもあった。

この住居址群は時期を異にした2群に分かれている。

第1群は第6号址、第9号址でそのプランは、一辺 $5.2m \times 5m$ のやや長方形を呈した方形プラ

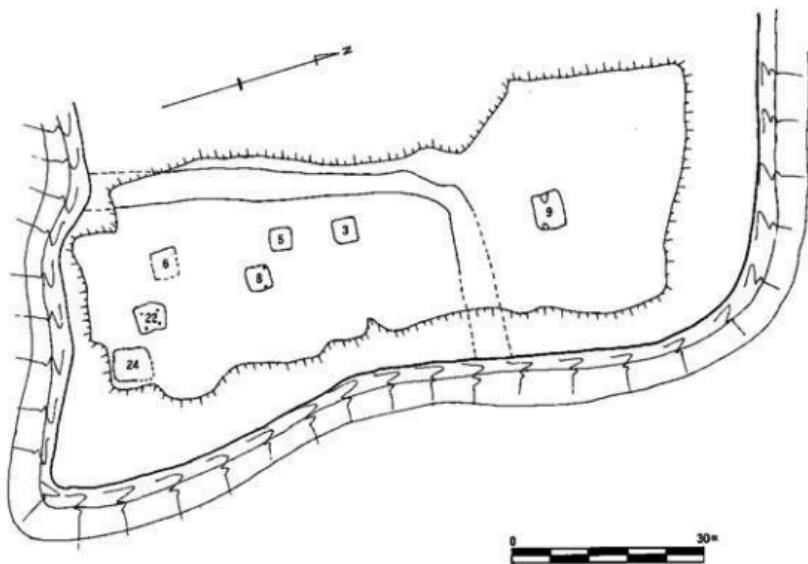


図47 平安時代遺構全測図

シで東壁に石組粘土製カマドが作りつけられている。ただし第9号址では使用中途においてカマドを西壁に移動し、甕4箇を焚口の骨材として組み合わせて構築してあった。遺物は、第6号址では土師質の壺・壺・須恵質の壺・壺・鉢・灰釉陶の長頸瓶を出土し、第9号址では土師質の壺・甕、須恵質の壺・甕を出土した。

第2群に属するものは、第3号址、第5号址、第8号址、第22号址、第24号址の五住居址で、平均約4.5mの限丸方形プランである。床面は低平、堅致でいずれも4柱穴である。ただし第22号址、

第4表 土師式竪穴住居址一覧表

国版番号	住居番号	プラン	法 量		柱 穴	周 溝	カマドと位置	遺 物			所 見	
			東西×南北cm	壁高				土师	須恵	灰釉		
49	3	方形	480×400	32	斜 壁 北壁は2号址と重複	主柱穴なし 南壁近くに巾5~10cm深さ5cmの周溝あり	西壁及南壁 東壁中央部 にあり、石組は少ない	甕1 壺1	甕1		主柱穴はない。ピットも少ない。 周溝はよくわかる。	
49	5	方形	378×420	20	斜 壁	主柱穴なし 他にもピットらしきものなし	西壁中央部 にあり、石組は少ない	甕3 壺2	甕1		西南の隅に基石あり、 小さな住居址である。	
49	6	正方形	420×420	32	斜 壁 南東の一部は不名	主柱穴と思われるもの1ヶ所他は不名	東壁やや北よりにあり、 石組は動いており不整形、焼土も多い	甕5 壺1 甕1	甕2 壺1	甕1		
48	8	方形	630×600	13	斜 壁	主柱穴3ヶ所	な し	な し			小さい住居址で遺物も少ない。	
48	9	方形	520×500	40	斜 壁 よく整っている	主柱穴1ヶ所	巾10cm深さ3~7cmの周溝あり	西壁中央部及び東南の角にあり	甕2 壺2 甕2		石組カマドの焚口に甕2箇を組みこんであった。	
48	22	方形	465×540	25	斜 壁 東北の壁は不備	主柱穴4ヶ所	な し	北東の角にあり	甕9 壺1 甕1	甕2 甕2 甕2 甕1	青銅製 容器	床面に凸凹がかなりあり住居址として使用したか疑問である。
48	24	方形	520×540	40	斜 壁 北東の一部不名	主柱穴3ヶ所、他に大小20ヶ所前後	な し	な し	甕1 甕8 甕2	甕2 甕2 甕1	配石址	他の住居址と少し違う祭址に使用されたと考える。

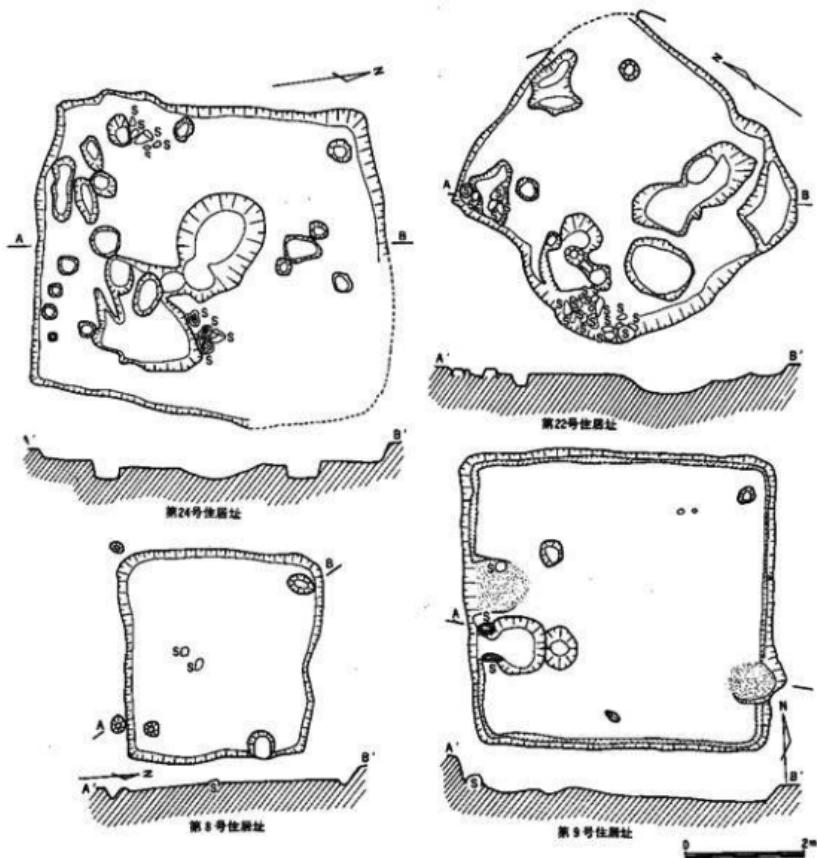
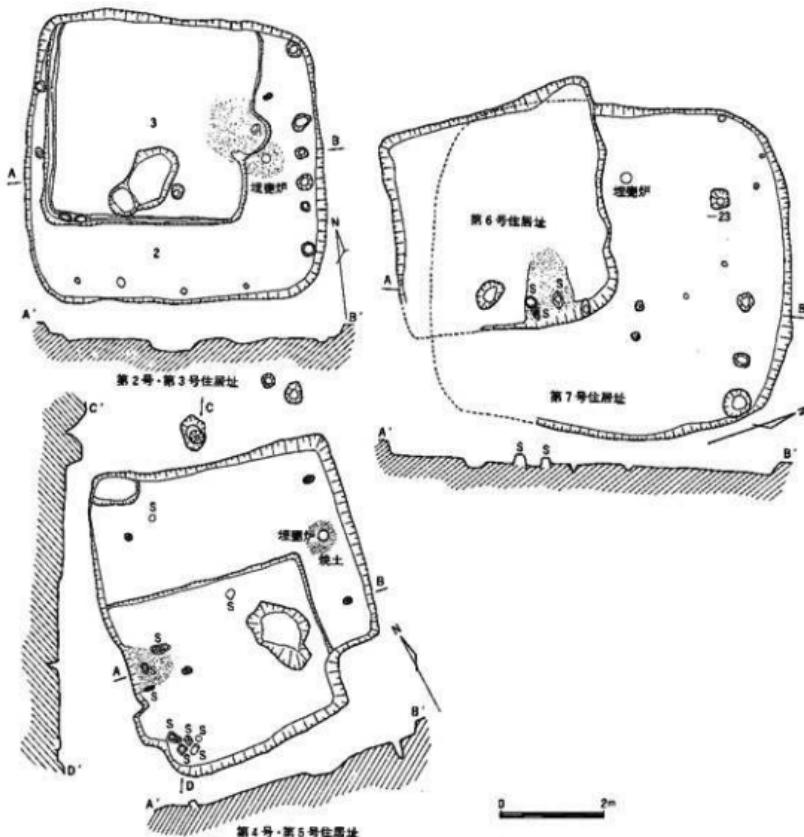


図48 土筋式竪穴住居址実測図(I)

第24号址は床面の凹凸が激しくカマドの所在も不明確である。

遺物は第3号址から土師質の甕・壺、須恵器の壺・灰陶陶の長頸壺を出土し、第5号址では、土師質の甕が卓越し壺が加わる。須恵質の壺・灰陶陶の壺を出土した。これに対して第22号址、第24号址の出土状況はやや異様である。この二住居址は集落の最南端の段丘崖に臨む位置に相並んでいる。第24号址においては竪穴の中央覆土中に枕大の石3箇を配した遺構があり、その周間に円盤形石製品(図58)、手捏環(図59)、在銘墨書土師器壺(図59)を配し、配石址の下部西側に灰陶陶器の塊および壺3箇を配してあった。(図51、52)

このうち塊は周辺を欠きとり底部のみを残したもので故意の破砕が認められる。これらの出土品



第49図 土師式竪穴住居址実測図(2)

は竪穴床面に存在した土師器壺3点、壇1点、須恵器壺1点とは同時期のもので大した変化は認められないことから、竪穴住居址廃絶時に同時に埋納したのではなかろうかとの印象が与えられた。また西側に接する第22号址は、北壁の床面近くに青銅製盤が伏せられたまま遺存したが、この住居址では須恵器が卓越して壺が多く加えて長頸壺・甌があり、土師質の甌・鉢・灰釉陶器の長頸甌を出土した。床面に大小の不整ピットが多い点、遺物出土量の多い点などからみて特殊の遺構であり、極めて祭視的な要素が濃厚であることを特記したい。

(林 茂樹)

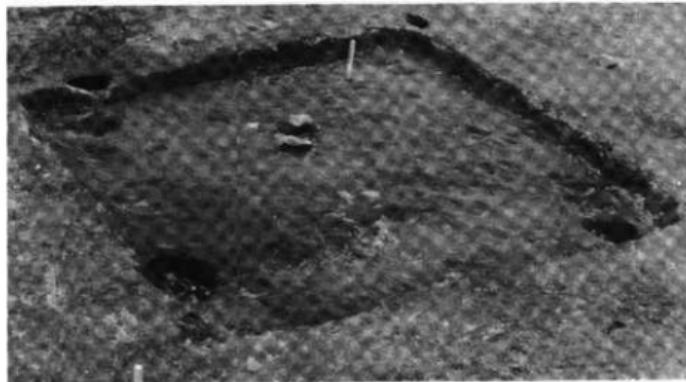
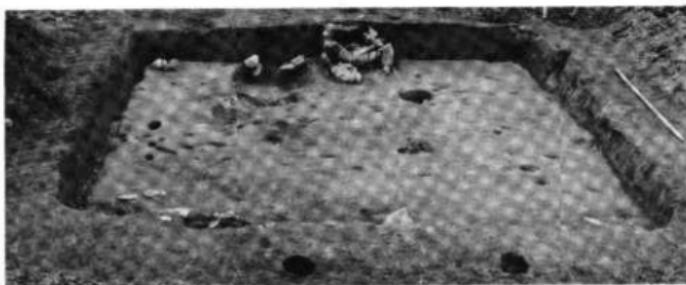


図50 土師式竪穴住居址発掘状況（上—第9号址 中—同カマド 下—第8号址）

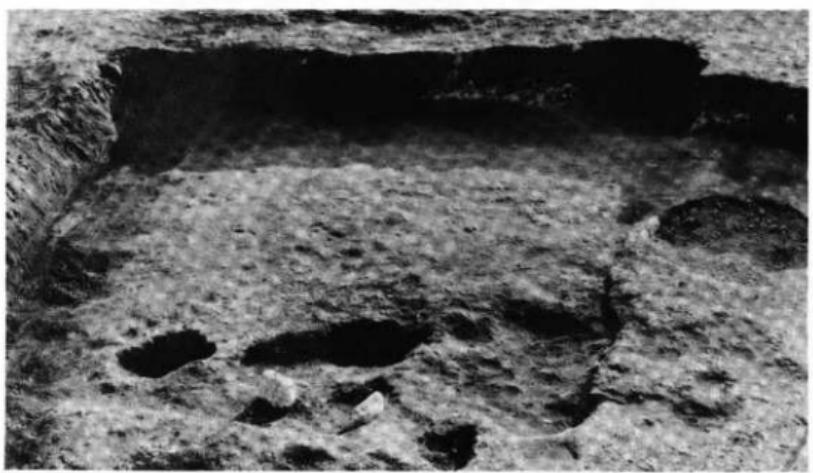
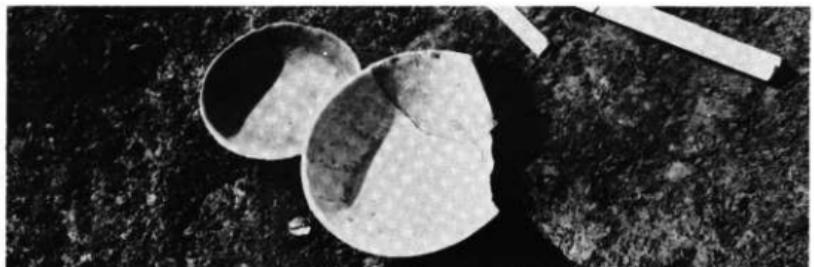


图51 第24号址 (上一灰釉陶器 中一土筛器 下一出土状况及第6号竖穴住居址)